
ピアノ教師佐和子の日常

柚子莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピアノ教師佐和子の日常

【Nコード】

N8229A

【作者名】

柚子莉子

【あらすじ】

ピアノ教師佐和子と新米刑事ホスト歴ありの青山、ベテラン刑事笹垣勉が繰り広げる官能推理ギャグサスペンス。世代な方にはある意味たまらないツボにはまっていたら幸いです。

第1話 「first contact」

まるで津軽三味線のような忙しなさで、
クマ蝉がわっしやわっしやと啼き散らしていた。

ようやく梅雨明けした関西の茹だるような日差しの中、
若い男が汗を拭きつつ、年配の男と肩を並べ歩いている。

アスファルトからの放熱が、目の前にゆらゆらと
陽炎を作るほどの、まさに灼熱の地獄だった。

「たまりませんね・・京都の夏は。ボクは東京生活が長いもので
この湿度にはほんと辟易しますよ。」

「そうか。関西人は毎年こんな鬱陶しい夏を耐え抜いてきとんや。
まだまだ梅雨が明けたばかりやで。夏はこれからが本番や。」

「え・・これ以上に暑くなるんですか。勘弁してくださいよ・・。」

青山和彦 25歳。

駆け出しの刑事であるこの若い男は、
刑事にしておくには勿体無いホスト並のルックスを持っていた。

いや、事実刑事に転向する前は、ホスト業をしていたのだ。そんなホストな青山が何故突然刑事に転向したのか。

この強引な物語設定に四の五の言っている暇はない。もしかすれば物語が進むにつれ筆者の気紛れにより真相が明らかになるやもしれぬが、まずは本題へと戻ることしよう。

ホスト並みの甘いルックスを持つこの青山を

年配の刑事、どこかで聴いたような気がする苗字の笹垣は、女が鍵を握っていると睨んだ事件の時に、好んで同行させた。

笹垣ほどのベテランが、足手まといにしかない新入りを引き連れて歩くなど、どうかしていると上司も同僚も訝ったものだったが

笹垣は知っていたのだ。

女が青山の顔をひと目見た瞬間に、態度を変えることを。

それはあからさまな場合もあれば、ほんの僅か微妙な顔色の変化であったりもした。しかし、ベテラン笹垣はそれを決して見逃さなかった。

青山のルックスは女の心を惑わせて、事件の重要な手がかりとなるヒントを思わずぼろりと、女に吐き出させてしまうのだ。

青山本人はその能力に全く気がついていないようだが、

彼はこのような妙技を知らずに使っては
難解と呼ばれた事件の最大の鍵を
これまでもジャラジャラと女から引き出してきたのだった。

こずるい笹垣はそれらを全て自分の手柄として
上に報告していたのである。

「で、今日はどういう事件なんですか？」

「まだ、ワカランな。他殺か自殺か、なんの事件性もないかもしれないかもしれんし。」

「やっぱり人が死んでるんですね・・・やだなあ。
ボク、死体見るとその日の晩御飯が美味しく食べられないんですよ。」

ああ・・・今日はアイコのお手製のメンチカツの予定なのに。
メンチカツはさすがに死体見たあとに食べるのってキツイっすよねえ・・・

どうしようかな。ナオミのあっさり冷麺に変更しようかなあ・・・

「もう現場に死体はないよ。今、検死中だ。」

「・・・そうめん・・・あ、いや、そうですか。それは良かった。
しかし・・・検死ということは、
死因になにか不都合な点があるってことですね。」

「そういうことや。見えてきたで。あの角の家や。」

笹垣が顎でしゃくった家を、青山は見つめた。

加納佐和子ピアノ教室と書かれた
手製の看板が目に入る。

（ピアノの教師か・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・。）

長い沈黙の間に青山が脳裏に抱いた淫らな映像を
18歳未満も見ているかもしれない此処で赤裸々に書くことは叶わ
ない。

賢明な読者諸君は精一杯にイメージーションパワーを発揮して
ひととき、青山と同じ気分を味わっていただきたいと切に願う。

しかし、笹垣のしゃがれた声が、甘美な妄想タイムを
あっさりと青山から奪うのであった。

「ワシはな。加納佐和子がクサインやないかと睨んでるんや。青山よ、おまえのホストの勘とやらではどう見えるか、あとで教えてくれるか。」

笹垣はそういうと、ニヤリと笑った。

（ピアノ教師は臭いのか……。お風呂嫌いなのだろうか……。）

青山がまるで違う部分で、さてどうしたものかと悩んでいることなどまったく気がつかない笹垣は、ピアノ教室のチャイムを押した。

「はい・・・」

カチャリと扉が開き、そこから顔を覗かせた女を見て青山の全身に電流が走る。

（臭いのが惜しいほどに、美しい人だ・・・）

加納佐和子 34歳。

これから起こる様々な怪事件の鍵を握るかもしれないピアノ教師とホスト出刑事青山の、これがファースト・コンタクトであった。

第2話 「innocent aoyama」

部屋にはグランドピアノが置いてあった。

笹垣と青山が通された部屋は
加納家の客間のようなだった。

「すぐに現場に通さんところが、なんとも臭うな・・・」
笹垣が隣でそつと呟くのを、青山は複雑な気持ちで聴いていた。

（加納さんという人は、それほどに体臭がキツイのか・・・）

青山としては、様々な意味で

将来的にそれは非常に困る展開になるであろうと

予測したのだった。

予測は本能によるもので、

綿密に計算されたり、統計上導き出されたものでは断じてない。

青山は本能でのみ、生きてきた男であった。

そしてそれは恐らくこれから彼の人生の中でも

第一のモットーとして君臨し続けるだろう。

「豪勢なソファ使うとるな。ピアノ教室ちゅうのは儲かるもんなんやな。」

笹垣はソファに身体を沈めるようにゆったりと腰掛けると

部屋のあちこちを胡散臭そうに眺め回した。

（出た・・・笹垣の舐め尽くし・・・）

どう見てもそれは、山の手線の満員電車内に潜む

スキあらば女性の身体にタッチングして悦楽の時を得ようとする痴漢の目と同質のものなのだが、

青山はそれを笹垣に忠告すべきかどうかで常に迷った。

署内抱かれない男ナンバーワンの青山にとり

署内抱かれない男ナンバーワンの笹垣への不用意なる忠告が自らの身を滅ぼす可能性があることを、

青山は長年のホスト経験により、またも予測したのだ。

予測はやはり本能であつた。

そんな本能剥き出しの青山の前に

煩惱まで剥き出されてしまいそんな悩ましい衣装に身を包んだ

佐和子が現れた。

佐和子はアイステイーとクッキーを入れた皿を

銀製と思われる盆の上に乗せ、扉を開けたところだった。

カタカタ・・・とお盆の上のグラスが揺れるのを見た青山は

まるで行く川の流れは絶えずしてしかも元の水にあらずのごとく

佐和子までの導線を見事なまでの流線型で描き

そっとドアを開けると、佐和子の手からすつと銀盆を取った。

「あ．．すみません」 佐和子が恐縮そうに呟く。

（出たで、出たで。 青山マジックが）

笹垣はにんまりと口の端っこだけで笑うと、
変質者まるだしの目で佐和子の身体の下から上へと
ゆっくりと視線を這わせた。

それに気づいた佐和子が不快そうな表情をしたのに
青山は気づき、そっと佐和子に目配せをした。

そのアイコンタクトに佐和子は理性を取り戻し

「どうぞ」と声をかけると、ティーとクッキーを2人へと勧めた。

「ワシは甘いもんは、どうも苦手ですな。」

笹垣はクッキーをひとつつまむと

鼻でフン．．と犬のようにニオイを嗅いだ。

これは長年の刑事生活ですっかり染み込んでしまった
この男の癖であった。

「そうでしたか．．すみません。

久し振りに焼いてみたので、

お口に合うかしらとは思ってお出ししてみたんですけれど．．」

「ほほ．．これは貴女の手作りというわけですか。」

「え？！加納さんの手作りなんですか！」 青山が興奮した声を出した。

青山は大の甘いものの好きで有名な男だったが
なかでも「手作りクッキー」「手作りケーキ」「手作りマーマレード」

「手作りハウスのゼリエース」など

「手作り」と名のつくものには
めっばう弱い男であった。

時折、青山にとっても似つかわしくない地味な女と

短い間交際することがあったが、

そんな時は、必ず手作り攻撃にころっと参ってしまった

青山の裏事情があったのだ。

「ボ、ボクいただきますよ！！大好きですから！手作り！！」

「まあ・・・ほほほほ」

あんまり無邪気な青山の様子に、

思わず佐和子は声をあげて笑った。

（天使のような微笑だ・・・） 青山はうつとりとそれを見ている。

笹垣はそんな二人の様子を蠅取り紙級の粘着質な目でじーっと観察していたが、徐に口を開いた。

「しかし・・・なんですなあ、佐和子さんとおっしゃいましたか。この家で殺人事件があつたわりには、優雅にクッキーなどお焼きになつている。もう落ち着かれたということですかな。」

それまで口元に手をあてて愉快そうに笑っていた佐和子は、急に真顔になると、笹垣へと向き直りじつと彼を見つめた。

「ええ。お陰さまで、もう随分と。あの日のことは、思い出したくもないものですから。できるだけ気の紛れることをして過ごそうと心がけているんですよ。」

「ほお・・・そうですか。それでクッキー作りですか。」

笹垣の意地悪な質問に、ぷうぷうと頬を膨らませて拗ねた様子を見せた。・・・青山が。

「笹垣さん、いいじゃないですか。どうしてクッキー焼いたらいけないんですか。そんな法律ないじゃないですか。」

「おまえは黙つてい。それより、クッキーが唇を囲む用にくつついてるぞ。」

情けないから、はよ、取れ。」

「まあ・・・！！ほほほほほほ。」

再び佐和子の顔に笑顔が戻った。

鼻のような人だ・・・青山は思った。

心の中で考える時ですら、誤字る男だった。

「さて・・・それじゃ、こんなところで長話もなんですからそろそろ、ピアノ教室とやらのほうへ、ご案内いただけますかな？」

笹垣の獲物を追い詰めるかのような、じつとりとした声がアブラゼミのジージー啼く音よりもジンメリと部屋に響いた。

“ワシは加納佐和子がクサイと思うとるんや”

青山は笹垣の言葉を思い出していた。

居間は消臭スプレーファブリーズが効果的に使われているのだろう。

青山の詰り気味の鼻には、なんの異臭も感じられなかった。

そもそもボクは蓄膿^{じゆ}ぎみなんだ。悪臭はさほどボクの敵ではない。

青山はそれを三回、心で繰り返した。

佐和子はゆっくりとソファを立ち、「どうぞ、こちらです」と呟^{つぶ}いた。

悠然と泳ぐ鯨のような笹垣^{さかき}の背を、コバンザメのようにちょこまかと青山は追いかけた。

第3話 「evidence」

ピアノ教室は、美しい庭を隔てた離れにあった。

ひととき大きな向日葵の花が

夏の日差しを浴びて、100点を取った子供のように誇らしげに揺れていた。

しかしそれは青山には未体験の“誇らしさ”だった。

彼のこれまでの人生に100点の記憶はない。

池の面に薄らと映り込んだ、金や赤がすいと動いた。
鯉だ。

青山は、池の水に

鼻がずぶりと浸かっているのにも気づかないほどに覗き込んで
歓喜の声をあげた。

「金魚だ！金魚ですよ！笹垣さん！

懐かしいなあ。昔、縁日で金魚すくい、よくやりましたよ！

あれって、釣れなくても2匹ぐらいくれたりするんですよえ。

“トトオ”って名前つけて飼ってたなあ。

あ、“トトオ”って分かりますか？笹垣さんに分かるかなあ。

“不思議なメルモ”ってアニメがあったらしいんですけどね。

メルモちゃんの弟がトトオって名前で

これが不思議なキャンディの分量を

いいかげんに割って食べちゃったもんだから

カエルに変身しまうんですよ。あれにはホント参りましたよ。

何故かって？だってカエルはキャンディなんか喰えないじゃないっすか。

だから人間に帰ろうにも戻れないんですね。

もうどうなることやら、ハラハラドキドキだったんですけど

一体どうやって人間に戻れたと思いま・・あれ？あれ？笹垣さん？？

ちよちよちよ、ちよつと待つてくださいよ〜！

どうやって戻れたか聞きたくないんですか！？

さーさーがーきさー・・・。

笹垣は黙々と、佐和子の後を歩いていった。

佐和子の微妙な仕草をひとつも見逃さないために。

今からピアノ教室へと向かう。そこで一人の人間が変死した。

もしも佐和子が今回の事件になんらかの形で係わっているとすれば必ずや心の動揺を見せるはずだ。

―事件。笹垣は、今回のことを突然死などの類ではないと見ていた。あの死体は、必ずや人の手がかかった「他殺体」であると、そう感じていた。

それは笹垣が長年の刑事生活で得た、確信と言って良かった。

心の動揺は様々なところに仕草となって現れる。

瞬きが増えたり、やたらと首を傾げたり。

視線を外して話すことが多くなったり、汗をかいたり。

そして多くの者は能弁になった。

人はやましいところがあると、必要以上に言葉数が増えるものらし

い。

「さーさーがーきさーん!!」

青山が、ギャロップ（乗馬で、馬の最も速い駆け方。

四本の足が一度に地面を離れるように速く走ること。

駆け足。駆歩くほ。襲歩しゅうほ。――で、追いついてきた。

「・・・おまえは、ロンパールームか。」

「え？なんですか？ロンパールームって。」

「・・・不思議なメルモを知つとるくせに、ロンパールームは知らないのか。」

「メルモちゃんは、ホスト時代の上得意客にビデオを全巻借りたんですよ。」

リアルタイムで見ていたわけじゃないですからねえ。

で、さっきのトトオちゃんの話の続きなんですけどねえ!」

青山が滔々とトトオについて語るのを、笹垣は

以前から用意しておいた耳栓を用いることで完全にシャットアウトした。

この男は、アニメについて語りだすと最後まで語らないことには決して他の話に移ろうとしない困った癖の持ち主だったからだ。

佐和子は別段変わった様子を見せるわけでもなく、
淡々とピアノ教室までの道を案内した。

しかし佐和子に微かに微妙な心の動きがあったとしてもそれは全て青山の甲高い「トトオ」の声にかき消されてしまいさすがの笹垣も終いには青山を怒鳴りつけた。

「うるさい！カエルになったトトオが鍋の中で煮えそうになってポケットに入れてたキャンディがぽろっと湯ん中に落ちてもうて茹で上がってその蒸気吸って人間に戻る話なんか、どうでもええんじゃない！！！」

笹垣は結局、トトオの「劇的瞬間人間帰還感動シーンの詳細」という誘惑に打ち勝てなかったようだった。

青山はとても話し上手な男だったのだ。

（カエルのくせに、洋服着とったっていう設定がそもそもオカシイやないか・・・）

笹垣の推理はいつのまにか、今回の殺人事件から手塚治虫の世界へと完全に移行してしまっていた。

（いかん、いかん。ワシとしたことが。気を引き締めんと。）

笹垣は大きく2つ咳払いをし、佐和子の後に続いた。

青山も大きく3つ咳払いをした。

なんでも張り合い勝つことに喜びを見出す男であつた。

笹垣は更に大きく4つ咳払いをした。負けることの嫌いな還暦前の男であつた。

青山も更に更に大きく5つ咳払いをした。5つ目は「チクショー」までつけておいた。

笹垣が負けた。

「・・・どうぞ。」

佐和子がピアノ教室の扉を開けた。

笹垣に続いて、青山も部屋に入った。

ピアノ教室は、先ほどの居間に比べると随分簡素な部屋だつた。居間にはグランドピアノが置いてあつたが、此処のピアノは

一般家庭でよく見かける、普通のタイプのもので
居間で見たような豪華なソファはなく、
代わりに木の椅子が壁に沿うようにして3つ並べられていた。

しかし笹垣は、ある奇妙さに気づく。

部屋に敷かれていた絨毯にくつきりと残された4つの痕跡を見つけたのだ。

それはおそらく、ソファの足部分の跡だと推察された。

（ほほお・・・この部屋にはどうやらソファが置いてあったようやな・
・）

笹垣はにんまりと笑い、佐和子を見た。

佐和子はピアノの前に立ち、窓の外を見ていた。
その険しい表情から、
この部屋には一秒たりとも長居したくはないといった佐和子の感情が垣間見えるように笹垣には思えた。

「で・・・佐和子さん。
ご主人はどの位置に、どのようにして倒れてはったんですしたかな。」

「もう何度も警察の方にお話しましたけれど。」

「ハハ・それは申し訳ないですなあ。」

しかし、これがワタシらの仕事ですよってに。
なにぶん、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げたいんです。」

「・・・・・・・・。」

佐和子は小さくため息をついた。

「夫は・・ちょうど、今、笹垣さんが立っていらっしやるあたりの
場所に

仰向けで・・」

「ほほお。この場所ですか。」

笹垣はわざと大袈裟に驚いて、片足をあげてみせた。

「・・で、この跡はなんですかな？」

「・・・・・・・・え？」

「ここに4つ、絨毯がへこんでいるところがありますやろ。
何かが置かれていたと考えるんが、自然ですわな。」

「・・・・・・・・それは・・椅子です。」

「ほお。椅子。どんな椅子でっしゃろ？」

その窓辺にある椅子にしては、この跡は大きすぎますな。

「・・・ソファです。」

「ほほ、ソファ。それは、何処にやりはったんですか。」

「捨てました。」

「捨てた？そらまた、なんででっしゃろ。」

「見るたびに夫の死を思い出すからです。・・・辛くて。」

「ほお・・・。」

この部屋で死んでいたのは、佐和子の夫の周作だった。

佐和子の話では、

それまで普通にこの部屋で夫と歓談していたらしいのだが

佐和子がお茶を入れに部屋を出て、戻ってきた時には、

既に床に転がり、夫は息絶えていたのだという。

なんと臍に落ちない佐和子の説明に、

誰もが一時は佐和子を黒だと思い、厳しく取り調べたのだが

その後の執拗な事情聴取にも、

彼女はただ同じ話を延々と繰り返すだけで

どうにも埒が明かず、

話はいつか、笹垣の元へと回ってきたのである。

「妙な話ですな。旦那さんの死を思い出す言うんやったらこの部屋の中の全てが、そうなるんとちやいまつか？

・たとえば、このピアノなんかも。」

「ピアノを捨てることはできませんわ。

此処は、ピアノ教室です。生徒さんもいらっしゃるのですし。」

「しかし、この部屋で旦那さんが死んだことで貴女が憂いに思っているんですしたら

極端に言うたら、教室を閉めてしまっぐらいされるんちやいますか。それが、何故、ソファだけを処分するのか。

奇妙な話です、奇妙な話ですなあ。」

「・・・できれば私もそうしたいですわ。でも私にも生活というものがあります。

食べていかねばならない。ピアノ教室を閉めてしまうことは今の私には、死活問題となるのですよ、笹垣さん。」

「でも、何故ソファのみを？

他にも捨てはったもんはなんかあるんですか？」

「ありません。」

「ほほお。捨てたんは、ソファのみやというわけですな。」

「いけませんか？」

「いやいや。それは佐和子さんのご自由です。」

しかし旦那さんの死後、なんでソファだけを捨てはったんかがワタシとしては非常に気になる場所ですなあ。

なあ？青山？おまえはどう思う？妙な話やとは、思わんか？」

青山は2人に背を向けて、窓辺に立ち、一心に庭を見ていた。

将来は確実に薄くなりそうな、青山の細いサラサラの髪を風が弄ぶように揺らしていた。

（全く・・・風にまで纏わりつかれとる）

笹垣は、絵になる男「青山」の背に、もう一度、声をかけた。

「おい、青山よ！なんしとんねん、おまえ！庭に、なんか気になるもんでもあるんかい！」

その瞬間、青山の身体は急にグラグラと横揺れし、そのまま遮断機が下りるかのごとく、スローモーションで床に倒れこんだのだ。

劇団ひまわり級の演技であつた。

（さては、青山マジックか？） 笹垣がそう思うよりも早く

「まあ・・・！大変・・・！」 と、叫んだ佐和子が、

慌てて青山の元へと駆け寄つた。

青山の頭を膝に抱きかかえ、

赤子をあやすように介抱しようとする佐和子を

笹垣は腕を伸ばし静止した。

「佐和子さん。急に倒れた人間に、むやみに触れるもんやおまへんで。

ご主人を発見された時にも、そんなふうにしやはつたんですか？」

「刑事さん！部下の方が倒れたんですよ！？」

貴方は心配じゃないんですか？」

佐和子が話を摩り替えようとしているのは見え見えであつたが、真つ青な顔をして苦しうに顔を顰めている青山の顔を、念のため笹垣は覗きこんだ。

そして次の瞬間、

バシバシバシと青山の頬を平手で返し打ちしたのである。

「な・・・なにをするの！？刑事さん！」

「こらっ！！青山、おまえ、息せんかい！！！！！」

笹垣の地鳴りのような大きな声をきっかけに、

ぷは……っ……!!!!という、

これまた大きな音が教室内に響き渡った。

「げほ……げほげほ……こほこほ……!!!!!!」

青山は激しく咳き込んでいる。

佐和子は思わず、青山を膝に抱きかかえた。

「大丈夫？大丈夫？」　懸命に青山に話しかける佐和子。

青山は憂いのある瞳で、佐和子を下から覗き込む。

それは年端もいかぬ幼子のようにもあり、
ほどよく熟した甘い果実の芳香漂う、

エデンの園のアダムのような妖艶さも同時に持ち合わせていた。

（さすが……ホストNO.1やったことのおる男やで……）

時々笹垣は、何故このようなどうしようもなくバカな男が
あの厳しいホスト業界で、1位の座に君臨していたのか
どうにも不思議になることがあったのだが、

このような青山の表情に出会う時、深くそのワケを知るのである。

（女を一瞬で、メロメロにしてしまう技を持つとる。
あんなもん、ワシがやっても気味悪がられるだけや。

事実、こないだ久々に寢床でタミコに仕掛けてみたが、
アイツそのまま極楽逝ってまうんちゃうか思っぐらいに、
大笑いしよってからに・・)

笹垣は、先日の夫婦生活の顛末を思い出し、苦々しい気分になった。

「はあはあはあ・・・」

青山の顔色に赤みがさしてきた。もう、大丈夫なようだ。

「いったい、なんじやい急に。立ち眩みでもしたんかい。」

「はあはあはあ・・ひ・・ひえ・・ふ・・ふみはへん・・・」

「ああ??なんやて??なにを言つとんや。舌でも痺れとんのか?」

「ひ・・ひえ・・は・・はなひかへないへくらはいよ・・・」

「

「・・・おまえ、なんで息止めてるんや。」

青山と笹垣は暫しの間、無言で見つめあった。

青山は笹垣を実に恨めしげな瞳で見つめると、
ひそひそと小声で話し出した。

(なんで今それを、ここで言つんですか!佐和子さんが聞いたら気分が悪いでしょう)

「はあ？なにがや？なんでや？」

（ボクが小声で話してる意味がないじゃないですかっ！
笹垣さんもヒソヒソしてくださいよ！）

「ヒソヒソて・・アホか、おまえは・・」（・・で、なんで息止
めとったんや。なんかあるんか？↑ヒソヒソ声）

（笹垣さんは、なんで平気なんですか？この部屋は猛烈な悪臭に見
舞われているというのに・・）

（は？悪臭？もう死体はないし。第一、あつたとしても腐乱しとっ
たワケでもないぞ？

ニオイなんかするかい。）

（違いますよ！死体のニオイじゃなくて、佐和子さんのニオイです
よ！）

（佐和子さんのニオイ？佐和子さんになんのニオイがするいうんや）

（もう~~~~~笹垣さんがボクに言ったんじゃないですかー！

！！！

佐和子さんの体臭はヘビー級に臭いつて！！！！↑大声」

ピアノ教室がしん・・と静まり返った。

あんなに忙しく啼いていた蝉も、まるで一匹残らず消えたように。

笹垣は啞然としている。
青山は呆然としている。

そしてそんな二人の顔を交互に見つめる、悲しげな佐和子の瞳があった。

「……酷い。酷いわ……！酷いわ！！」

ゴンッ……！

佐和子は床に青山の頭を、西瓜を扱うよりも遙かに邪険に転がすと涙を拭うようにして、バタバタと教室を出て行った。

再び、蝉時雨が、部屋に喧騒を運んできた。

床に転がされた青山と、それを見下ろす笹垣と。

2人はまるで宝塚劇場の舞台上、悲恋の恋人同士のように

いつまでも、いつまでも、無言で見つめあうのだった。

第4話 「suspicion」

そこはかたくなくジンジンとする後頭部を摩りつつ
青山はきんつばを食べていた。

きんつばは、口の中いっぱい広がるまったり感を愉しめる
悦楽和菓子として青山が強く人に勧める一品だったのだが、

真夏のきんつばは、どうも人氣が無いらしく
今日も署内の女の子にやんわりと断られたばかりだ。

笹垣が聞き込み捜査から戻ってきた。
汗だくだ。

今日も記録的な猛暑となった京都だった。
自販機で買ったのだろうか。

壮健美茶の500mlペットボトルを手にしている。

「壮健美茶はボクの趣味じゃない・・・」 青山はそう思ったが
今は、猛烈に彼女（美茶）が欲しかった。

口の中がきんつばパニックを起こしかけていたのだ。

「にやにやにやにやん。おにやえににやにやい。」

青山は笹垣の元へ走り寄り、満面の笑顔で彼を迎えた。

笹垣はいきなりネコ語で現れた青山を、

胡散臭そうに一瞥しただけで

ドカリと椅子に腰掛けると、

残りの壮健美茶を、ゴクゴクと飲み干し始めた。

「にゃー！にゃにゅにゅんねにゅにゃー！

にのぬにぬにゃい

によにゅに にゅにゃにゃいにょー！！！！」

青山は悲鳴をあげ、笹垣の飲茶を阻止しようとしたが

笹垣は顔色一つ変えずに、

全ての茶を飲み終えると、「ふう」と大きく息をついた。

「・・・なんや、青山。ネコ語で話すんは、

天才てれびくんの対決コーナーだけで充分やで。」

「にゃんねにゅにゃ、によれ！

によんな にゃんにゅに にょにゅにゃ ににゃねんにょー！」

「・・・なんですか、それ！そんな番組 ボクは知りませんよー！・・・
か。」

「・・・！？にゃにゃにゃにゃにゃん・・・にゅによい・・・。」

「・・・！？笹垣さん・・・すごい・・・と。」

にやにゆにやにゆ喚いている青山に、

笹垣はもう一本持参していた緑茶を黙って手渡した。

後でじっくり堪能しようと密かに愉しみにしていた、一緑茶はっさだった。

青山はそれを恐ろしいスピードで飲み干すと、
タン・・・！と机の上に置き

「にゆにゆいねにゆね！！」

にやにやがきにゃん・・・！ボク、にゃんどうしましたよ！！」

と、徐々に人間言葉に戻りつつ、興奮して捲くし立てた。

「ところで、天才てれびくんってなんですか？」

「・・・なんでもない。それより頭は大丈夫なんか？」

「ちよつとジンジンしてますけど、全く問題ないですよ！」

「さやか。ほんならえーわ。しかし、おまえ・・・」

おかげであれ以来、

全く加納佐和子とコンタクト取れんようになってもたやないか・・・

「

笹垣は、ため息をついた。

青山もため息をついた。

笹垣は、更に深いため息をついた。

青山もよりいっそうに深いため息をついた。
眸を潤ませる効果も怠らなかった。

またも、笹垣が負けた。

「ワシが“臭う”言うたんは、“アヤシイ”という意味や。
それぐらいの刑事用語がわからんでどうすんのや。

そもそもこれが刑事用語なんかどうかすら、アヤシイやろ。
5つの子にも通じるニユアンスや、ちゃうか？」

「そ・・そんな怒らないでくださいよ。

クサイと言われたら、誰だってまず、異臭を思い浮かべますよ！
ボクが一番最初に思い浮かべたのは、

小学校の頃にいったキャンプ先の公衆便所の臭いでしたよ。

あれはほんとに臭くって、食べたカレーが・・」「だーーーーー！
ーっ！！！」

笹垣は、強引に青山の話に割り込み、
寸でのところでその先を堰き止めた。

彼はさつき、

駅前のカレー屋でチキンカレーを食べてきたばかりだったのだ。

「あ、すみません。汚い話しちゃうところでしたよ。
止めてくださって、ありがとうございます！」

「いや・・・別に礼を言われることでもない。」

「ボク、昔おばあちゃんの家で飼ってた鶏が

肥溜めに落っこちてまっ茶色になって死んだの見てから

チキンカレーってのがどうも苦手なんですけど、

ますますカレーが苦手になるところだったもんで、つい・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

喉のあたりに酸っぱいものがこみ上げてくるのを感じた笹垣は
いつそ、この男の顔面に全てをぶちまけてやろうかと

殺意じみた感情でそう思ったが、

（もしやコイツはそれまでもを、悦楽として受け容れるやもしれん）
という、得体の知れない恐怖が、

彼の殺意を平常心へと急速に戻した。

（そうや・・・この男は

相手の剥きだしの戦意までもを喪失させてしまう力を持つとる。

おそらく、この手で

ホスト時代もライバルを知らずに蹴落としてきたんやろな。）

ふと笹垣は、青山がなにもかもを承知のうえで緻密に計算し、

わざとバカな真似ばかりをしでかしているのではないかと考えた。

しかし今、目の前で

鼻毛が抜けずに涙ぐんでいるこの男を見た瞬間に

真面目に推理しようと試みた 己の浅はかさを心から悔いた。

「青山よ。聞き込みの結果なんやけどな。」

「は、はい！」

「佐和子はソファを捨てたりしてへん言うことが分かったぞ。」

「そ・・・そうですか。」 青山の表情が俄に曇る。

「ボクも・・・おまるがなかなか捨てられなかった。

アヒルの形をしていたんです・・・

それを父親が無残にも首の部分でまっぴたつに切断して・・・」

「さよか。そこでそれをガムテープで頑丈に補強したんやな。」

「な！なんで分かるんですか！？」

「にやにやにやにやん、にゅによい！」

「・・・もう55回と1／3回聴いた話やさかいな・・・。」

「アヒルのことはおまえの胸に

哀しい思い出として閉まつといてくれたらええ。

問題は、佐和子が捨てた言うソファが、

捨てられた形跡が何処にもない言うことや。

ソファに、必ず事件の鍵となる、なんかがある。

そしてそのソファは、まだピアノ教室の何処かにあるはずや。」

「・・・ソファに何かが・・・。」

青山の脳裏に、ポチの言うままに庭を掘り

大判小判がザクザクで、

大喜びのおじいさん、おばあさんの顔が 浮かんでは消えた。

「ボ、ボクが 佐和子ピアノ教室に挿入してきます！」

おそらく「潜入」と言いたかったのであろうことに

笹垣は気がついてはいたが、黙って頷き、青山を送り出した。

そして慌ててトイレへと駆け込むと、胃の中のを

存分に吐き出したのであった。

笹垣 勉

― 人生の残り僅かな時間を、今後カレ―なしで送るハメになる男。 ―

第5話 「magic」

青山は自動改札で立ち往生していた。

幼き頃、切符も持たずに通り抜けようとしていきなり目の前でガチャンと閉まり

自動改札内に閉じ込められた経験を持つ青山は、

25歳という立派な大人の男になってもなお、

此处―自動改札―を、最大の鬼門としていたのである。

彼は、無性に自動改札が怖かった。

今日も緊張のあまり、またも切符を投入するのを忘れたまま

足早に改札を通り過ぎようとしたところ、ガチャン！と締め出しを喰らい

彼は「ひゃあゝゝおじやるさまあゝゝ」と

平安の世の電子ボタル級の弱々しい悲鳴をあげたあと
その場にへたりこんでしまった。

もう少しで先ほど笹垣から貰った緑茶500mlを

彼の体内の下半分中央から、残らず放出してしまうところだった。

しかしさすがに25歳の男が失禁はまずいであろうと

仮にもホスト出の青山は咄嗟に思いとどまり、

懸命に己のダムの放流を堰き止めたのだ。

駅員が慌てて青山の元へと飛んできた。

気分でも悪いのだと思っただろう。

やたらと親切に具合を尋ねてくる誠実そうな駅員を前に

青山はこれは誠に好都合なこととして、精一杯に青ざめた表情をつくり

苦しそうに呟いた。

「……………き……………切符を……………い……………入れ忘れてしまって……………」

致命的なミスを犯したことに、彼は幸いにして気づかなかったが、すっかり気づいてしまった一秒前まで誠実であった駅員は、途端に迷惑そうな顔をして、

彼の指に握り締められている切符をむんずと奪い取ると、さっさと機械に通し、青山を押し出してしまった。

突然冷たくなった駅員の態度に、青山は戸惑う。

彼は女性に冷たくされることは滅多となかったが、時折、同世代と思われる男性から

激しい拒絶らしき感情をぶつけられることがあった。

その原因の多くは、
青山のドン臭さや、救いがたいバカさ加減にあるのだが
彼はそれには気づかない。

男友達の全くいない、寂しい男であつた。

それでも魔の改札を抜けることができた青山はほつとし
佐和子ピアノ教室へと歩を進めた。

気でも狂ったかのように泣き喚く蝉に
彼は両の手で、己の耳を塞いだり、離したりして
ドップラー効果をひととき愉しんでいる。

それは傍目には、かなり不気味な姿として映った。

何故なら青山は、
自分の姿をある喫茶店のマジックミラーに映しながら
念入りに角度・タイミングのチェックをしていたからだ。

それは、喫茶店でティータイムを愉しむ客たちに
多大な精神的ショックを与えてしまっていたのだが
まさか青山の取るポーズのちょうどまん前に位置する席に
佐和子が座つていようとは、夢にも思ふまい。

偶然が、まことしやかに、2人の前に舞い降りた瞬間であった。

佐和子は、店内の客がざわめき始め、それに気づいた店員が青山の様子を暫く観察した後で、

無言で店の受話器を上げた瞬間に 席を立った。

店員は口頭注意ではなく、警察に連絡するという手段を選ぶのだ、と賢明な彼女は即座に悟ったのである。

そしてそれはとても尤もな行為であるとも彼女は思った。

それぐらい、青山の姿はギリギリだったのだ。

佐和子は急いで受話器を手に行っている店員の傍へ駆け寄ると

「すみません、あの人、私の知り合いなんです。」と声をかけた。

突然目の前に立った婦人のあまりの美しさを前に

若い店員は言葉を暫し失ったまま、

ゆつくりと、窓の外の青山と佐和子を交互に見比べた。

なるほど、黙っていれば確かにオトコマエなあの男とこの女性が知り合いであるのだとしても

なんら不可思議なことではない・・・ともいえるかもしれない・・・

と、店員が己を納得させるまでの間に、

佐和子は素早く会計を済ませると、店を出た。

「・・・刑事さん・・・！」

佐和子は、
相変わらずマジックミラー前で、
奇妙な動きに高じている青山に声をかけた。

青山のその奇妙な動きを、
佐和子は嘗て何処かで目にしたような気がした。

「あ・・・。マッチだわ・・・。」 彼女は小さく呟いた。

それは、マッチのデビュー曲のサビ部分の振り付けに
限りなく近いものだったのだ。

「あ！佐和子さんじゃないですか！」 青山は驚いて踊りをやめた。

「どうしたんですか！こんなところで！土偶ですよね！」

青山はにこにこしている。

（それも言うなら奇遇やろ・・・）と、
笹垣がいれば瞬時にツッコミを入れてくれるところだが、

本日、彼は青山の傍にいない。

ツツコミがなければ、青山の愚かさの程度は途端に跳ね上がるのだが
佐和子は先ほどの振り付けがとても気になっていたため
青山の「土偶発言」に気づかなかった。

たのきん世代の佐和子にとって、マッチはお気に入りのアイドルだった。

本当は野村義男に強く惹かれていたのだが、
それを口にすることを憚る世の風潮に彼女は逆らえず
トシとマッチを秤にかけた結果、毛の無いほうを選んだのだ。

佐和子は胸毛のある男を苦手としていた。
しかしだからと言って、ワキ毛のない男を選ぶことにも抵抗があった。

涙で枕を濡らし、ヨッチャン・・・と呟き眠ったあの頃が懐かしかった。

そして私の目に狂いはなかった、と佐和子は思っている。
なんだかねで、野村義男は
現在芸能界で独自の位置にしっかりとおさまっている。
ギターの上手さは天下一品といえるだろう。

「佐和子さん・・・？佐和子さん、どうかしましたか？？」

青山が佐和子の顔を、覗きこむようにして声をかけた。

「あ……！」 佐和子は思わず2歩後ずさりをしてしまう。それは少女のような恥じらいとなり、彼女をよりいっそうに魅力的な女に見せた。

青山は、仄かにピンク色に染まった佐和子の頬に
思わずお気に入りのア・ルト女優の○美ちゃんのある部分を
鮮明に思い浮かべたが、慌ててその妄想を振り払った。

いくらなんでも、佐和子に対してそれは失礼であろうと彼は思ったのだ。

同時に何故か、○美ちゃんに対しても申し訳ない気持ちになった。

青山という男は、常に、どんな女性に対しても公平な男であつたのだ。

「ご・ごめんなさい。ちよつとたのきんトリオのことを
懐かしく思い出していたものだから。」

佐和子を取り繕うように、笑顔でそう言った。

[illegible]

青山はくりと佐和子に背を向けると、今の台詞を反芻するように何度も頭の中で噛み砕いて、考えた。

（タ・キントリオ・・・）

今は・・・いいのだろうか、と青山は思った。

放送コードというものが、日常会話の中にも設けられるとすれば間違いなくひつかかる類の言葉ではないのだろうか、と彼は考えた。

しかもそれを花のような微笑で、明るくさりげなく呟く佐和子。

（不思議な人だ・・・いやらしさを何処にも感じさせない。
それがかえっていやらしい・・・）

いやらしいのは、青山であった。

「刑事さんこそ、どうしたんですの？こんな時間にこんな場所で・・」

「青山って呼んでください！」

青山は間髪いれずに見事に言い切った。

「青山・・・くん？」

上目遣いに照れたようにそう呟いた佐和子の表情に
青山の身体中に激しい電流が流れる。

「ああ・・・・・！」 彼は思わずその場に座り込んでしまった。

「ど、どうしたの！？青山くん！！」 佐和子は驚いて声をかける。

あ お や ま く う ん ・ ・ ・

それは、青山にとり 全身のツボをくまなく押さえられたような
衝撃であつた。

彼は甘いものに目がない男であつたが、

「くんづけ呼び」には、もっと目がない男であつたのだ。

幼稚園年長組さんで初めてカノジヨができたあの時からずっと
彼はカノジヨに対してだけは、頑なに「くんづけ令」を出し続けて
きた。

和彦くん 和くん 彦くん かーくん カツくん

様々な「くんづけ」バージョンを自ら考え出しては
試験的に歴代彼女に呼ばせてきた。

しかし・・・しかし！ なんとということだろう。
それは盲点であつたといつてもよい。

あ お や ま く う ー ー ー ー ー ん ・ ・ ・ ・ ・

「苗字＋くんづけ呼びがあつたとは・・・!!!!」

彼は溢れ出す涙を堪えることができず、

ハラハラと大粒の涙を両の眼から存分に流した。

蝉時雨。炎天下。アスファルト。灼熱地獄。

往来。喫茶店前。マジックミラー。嗚咽する男。

目の前で激しく泣きじゃくる25歳の顔だけは桁外れにいい男を
佐和子が自分のピアノ教室に一刻も早く連れ帰り
できるだけ人目につかない場所で話すことを選択したのも
無理はないといえるだろう。

署内のトイレで、あれから5回、
嘔吐を繰り返していた笹垣の携帯がチカチカと点滅した。

受信メールを知らせるその点滅を

笹垣は洋式便所を抱きかかえるようにして、
虚ろな眼で見つめた。

「佐和子さんと和えました。これからピアノ狂湿に向井ま酢。」

笹垣は頭の中で、お決まりの青山の激しい誤字を
正しい文字に素早く変換しなおしたあと
口の端っただけで、ニヤリと笑った。

「やりおったで……。これが、青山マジックや。」

第6話 「mistake」

佐和子ピアノ教室は美しい庭を隔てた・・

これは前回笹垣と共に此処を訪れた際、
既に入手している情報であつた。

今日はこの美しい庭を、青山は佐和子と二人きりで歩いている。

何処からか芳しい花の香りが漂ってくるような気がしたが
蓄膿気味の青山の鼻は寧ろ、
食用カエル、略して“シヨックン”の生暖かい臭氣に反応した。

血液型O型の青山の周りにブンブンと蚊が群がってくる。

青山はむやみやたらとバツテン印を右の手で大きく描き
シユシユツと蚊を追ひ払った。

その姿に、佐和子はまたも感銘を受ける。

「あ・・・シブガキ隊・・・。」

それはまさに、彼らのデビュー曲最大の山場である
「ジタバッタするなよっ！」の振り付けに酷似していた。

佐和子は、フツくん派であつた。
ヨツちゃんほどではなかったが、
やはり人目を憚るように彼を応援せねばならない、
そんな苦悩があつたことは否めない。

正統派だが、ワキが臭うと巷で噂であつたモツくんと、
ドッキリ番組で誰よりも先に責任逃れをし、
ヤバイ世界の人々から仲間を出し抜いて逃げようとしたヤツくんを、
佐和子はどうしても好きにはなれなかったのだ。

その後、時を経てイノツチに辿り着くまで
佐和子はどうしても、
表参道を堂々と渡り歩けない
アイドル趣味を抱えつつ生きている女であつた。

「どうも、蚊が多くて敵いませんね、この庭は。」

青山は白い歯を見せて笑つた。
虫歯のひとつもない、なおかつ矯正いらすの
歯医者への敵のような見事な歯であつた。

「あら？そつですか？蚊なんかいたかしら・・・？気にならなかつた
わ。」

「佐和子さん、失礼ですが、血液型は？」

「AB型です。」

「AB型・・・。素敵だ・・・。」

もしこの人がボクのお嫁さんになってくれたなら、
全ての血液型の子供がその気になれば生まれるのではないか。
青山はそのことを考えると、9人産んで野球チームを作るんだ！と
本気で思っていた小学6年生卒業時を思い出した。

そしてその時初めて、男は子供が産めないのだということを
クラスメイトの秀才中島から聞いて激しくショックを受けたことも。

（中島は、ボクが卒業文集にそれを懇切丁寧に書いて
先生に提出したあとで、事実を告げたんだ。・・あれは、わざとだ。
）

卒業文集には、将来の夢として

「子供を9人、ボクがしつかり五体満足に産んで、
野球チームを作るのが夢です。」

と、書かれた青山の作文が載っている。

何故、「ボクが」と強調して書いてしまったのか、と

彼は高校2年生の時点で

ようやく致命的なそのミスに気づいたのだが
もはや後の祭りであった。

しかし、青山は恨みだけは決して忘れない。

噂では歯科大に進み、そのまま親の病院を継ぐ形で

歯科医となった中島に復讐すべく、

毎日丹念に歯を磨き、歯間ブラシで隙間のカスも見逃さず除去し

決して歯医者者の門を潜ることなく一生を終えてやるつもりであった。
毎年白い歯を見せてにつこりと微笑む青山画像つきの年賀葉書を
中島歯科宛に、忘れずに出している。

「ゲゲゴ　ゲゲゴ」　何処かで食用力エルの啼く声がした。

青山は唐突に笹垣のことを思い出した。

そしてそれは誠に失礼な連想であると思った。

同時に、食用力エルに対しては、更に申し訳ない気持ちになった。

青山は男よりもか弱き生き物に優しい、そんな人物だったのだ。

「ピアノ教室は、この時間西陽が強くてとても暑いですから
私の部屋にご案内いたしますわ．．．こちらです、どうぞ。」

「え．．．。佐和子さんの部屋．．．．．。」

女が自分の部屋に男を誘う。

それにどれだけ深い意味が込められているのか。
ホスト業をしていなくても、容易に分かることであつた。

据え膳喰わぬは男の恥。

青山は早急にそれを念仏の如く13回繰り返した。

13回に意味があるとすれば、

どこか罪深き香りを持つ佐和子との契りの時を

13階段に準えることで、幾分緩和しようとしたものである。

しかし、そんな青山の脳裏に、ぬっと顔を出してきたものがあつた。

笹垣である。

「なあゝにを血迷つとんのや。おまえの使命は別にあるやろが。」

笹垣の一喝が青山の脳内で、

寺の鐘を撞いた時のようにくわんくわんと響いた。

（すすすす、すみません・・・！）

青山は慌てて心で笹垣に向け、頭を下げた。

「佐和子さん・・・！」　青山は佐和子を呼び止めた。

佐和子は訝しげに立ち止まり、青山を振り向いた。

「佐和子さんのお気持ちは体操嬉しいのですが・・・」

しっかり誤字っているのだが、
音声で捉えた佐和子には幸い気づかれてはいない。

「どうかピアノ教室で、個人レッスンをしていただきたい。」

個人レッスン 個人レッスン 個人レッスン 個人レッスン・・・

青山の精一杯の誠実な語りかけは、

「個人レッスン」という

非常に具体的なシチュエーションを持ち出すことにより、
一気にいやらしさを増し、佐和子へと直球となり飛んでいった。

佐和子はそれをバットの芯に当てて、青山へと打ち返した。

「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」

[illegible]

長い沈黙が二人の間を鈍行列車の如く緩やかに通り過ぎた。青い空に白い雲がぼかりと浮かび、

かおりちゃんは花を待てずに死んだ。

「セツク・ス・って。」

佐和子の顔面は蒼白になっている。

にじり寄りうとする青山に、佐和子は踵を返し、駆け出した。

「待ってください……！佐和子さん！何故、逃げるんですかっ……！」

聖女のような佐和子の口から出た

「セックス」というあまりにも唐突な言葉は、

もしかして「シックス」だったのではないかと、

青山に“聴き間違い”の想定を抱かせるほどだった。

同時に青山は、「個人レッスン」「セックス」という意味なのかと
大人の世界を垣間見たような気持ちになり、激しく照れた。

照れながら懸命に佐和子を追う青山。

佐和子は、小鹿のように庭を駆けていく。

青山は、尺取虫のように佐和子を追った。

青山は運動会リレー競技では、常にトラック半周部分で
先生に走ることを強制終了させられてきた過去を持つ男だった。

青山が走り終えるのを温かく見守っていることは、

運動会を時間内に滞りなく終わらせるためには、

学校側としては、

禁区―それはちょっとできない相談ね―な、話だったのだ。

それぐらい、鈍足な男であった。

「さ・・・佐和子・・・さ・・・佐和子・・・さ・・・」

得意のギャロップ走法も、佐和子のバンビ走りの前には齒が立たない。

刑事になってから、自分の足は速くなったものだと言った。青山は少しうぬぼれてみたことがあった。

それは、笹垣が自分に負けず劣らず鈍足であった為なのだと、今は彼は思い知った。

現実とは思わぬところで、いつもいつもボクに牙を向く・・・。

青山はハラハラと涙を零した。

その一滴が、庭の名も知らぬ雑草の上に落ち、ホワリンと弾けた。キラキラと夏の日差しを浴び、一瞬光った青山の涙。ふいに、青山の思考の全てがクリアになる。

「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」
「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」
「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」
「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」
「あんな場所で、貴方もセックスをなさるおつもりなの？」

アナログレコードの針が飛んだかのように、
何度も何度も繰り返されるそのフレーズに、
青山は「あ！」と声をあげる。

「貴方も」 佐和子は確かにそう言った。

“セックス”という甘美な囁きにカムフラージュされ、
自己主張を怠っていたその短い言葉。

「どういうことだ……。あの場所で誰かがセックスをしていたのか？」

それは誰が？

「ま……。まさか佐和子さんが、誰かと……。？」

夫の突然の死。取調べでの佐和子の腑に落ちない奇妙な証言。捨てられたというソファには、その痕跡すらなく、必ずあの教室の何処かにソファは今もあるはずだ、とベテラン刑事笹垣は言った。

青山は佐和子を追うのをやめた。

くるりと背を向けると、佐和子ピアノ教室へと向かい、黙々と歩き始めたのである。

斜めに射し始めた陽が、青山の左頬をくつきりと照らし出し、それは見事な陰影となり彼の表情を彩った。

憂いは男の色気となり、池の食用力エルすら黙り込んだほどだった。庭の草花がまるで、青山のために道を譲るかのようにさわさわと風に身体をまかせては、ようこそ、ようこそと囁き始める。

そんな青山の凜とした背を、物陰からじっとりと見ている目に青山は気づかない。

彼はピアノ教室の扉の前に立った。
鍵が掛かっているであろうとドアノブに手をかけた瞬間、
彼は頭部に激しい衝撃を受けた。

「ぐはぁ・・・っ!!!」

ぐらりと世界が回転し、

やがて周囲を覆い尽くすように闇が広がってきた。

知らない男の顔が見えたような気がした。

そしてその男の背の向こう側に、
怯えた眸で自分を見つめる 佐和子を見た、
そんな気がした。

第7話 「be well」

一体どれぐらいの月日が流れたのだろう。

恐らく季節が確実に2つは通り過ぎていったと思われる。

夏にはあんなにも

手入れの行き届いていた美しきピアノ教室の庭は、

まるで廃墟と化したかのように、荒れ放題になっていて

伸び切りだらりと垂れ下がった門柱の蔓が

頼りなげに北風に揺れていた。

あの日、突然後頭部に強い打撃を受けた青山は
果たしてその後どうなったのであろうか。

あれ以来ぶつりと音信を絶ち、

消息不明となってしまうた彼を慕い

女どもは狂ったように泣き喚き

ある者は尼になり、ある者は敬虔なクリスチャンとなり、

ある者はポエムを綴り、ある者はそれを自費出版で本にした。

またある者は私が一番彼に愛されていた女であることを強調し、
ある者はそれを強く否定し、

誰かが聞いた『青山の女ベストワンは誰だ』コンテストには
全国津々浦々から女どもが挙って参加する賑わいとなった。

そのコンテストで優勝した大柄な女性

―23歳〇〇独身ふたご座 88 57 89―を

青山がもし此処にいれば、思い出すのにたいそう苦労したことだろう。

彼女は、青山がいつかの正月に
意気揚々と観に行ったドラえもんの映画で
たまたま隣に座っていたことから、

映画後お茶を一杯とベッドを一度共にしただけの
そんな行きずりの女性に過ぎなかったからだ。

青山和彦 25歳。

誰もが彼の生存を信じ、彼が必ず帰還するであろうことを信じた。
それを信じていた者の多くの心の中で、

「バカは死なない」というワンフレーズが

まるで円広志の“夢想花”のサビの如き癖になるリズムで
絶えず頭のなかでわんわん鳴り響いていたかどうかはともかくとし
ても

笹垣勉、—— この定年前の敏腕刑事もやはり
青山の生存を固く信じ続けている一人であった。

笹垣は、石畳の階段をゆつくりとした足取りで上っていた。
暖かな年末となった2006年師走。

いつもは底冷えのする京都でも随分と過ごしやすい冬であった。

小さな花束を持つ笹垣が向かう場所は、石畳を上った先にある霊園
だ。

その霊園の入り口付近に『青山記念碑』が建てられているのである。

誰もが青山が生きていることを信じているというのに
記念碑の建てられた場所が何故霊園の入り口でなければならぬのか。

笹垣はあれからも加納佐和子身边を小まめにチェックしては
青山の生存に繋がるどんな小さなことも見逃すまいとしていたが、
その報告を青山にする際、時々此処を訪れることがあった。
そして訪れるたびにいつも妙な気持ちになる。

記念碑の前には、青山が大好きなものが常に大量に飾られている。
その中にはいつか彼が滔々と笹垣に語った
「不思議なメルモ」のビデオ全巻もあった。

花が絶えることもなかった。

薔薇、ガーベラ、百合などといった華やかな花もあったが
菊、榊などといったどう見ても仏事ごとを思い出してしまうような
お供え用の花も飾られており、

たまに線香の煙がゆらゆらと立ち昇っているのを見た時には
さすがの笹垣も慌ててそれを消し、処分したものだ。

誰かが石碑に殴りつけるように書いた「和彦くんのバカ」という文
字の

バの濁点部分だけが雨に溶け出して綺麗に流れ落ち

和彦くんのハカ

と、しっかり書かれていることが、やはり問題なのではないか。

笹垣は軽い怒りに身を任せながら、

青山の石碑に白い花を手向け、数珠を持つ手を合わせ
心で南無阿弥陀仏を唱えた。

・・・頭で考えていることと、行動がまるでチグハグな男であった。

青山はソファの上に横たわっていた。

まどろみの中、幾たびも聴こえてきたのは 美しく聡明な人の声。
その声が途絶えるたびに、彼の中に激しい快樂が走り
その未だ嘗て体験したことのない快樂の中に
青山はひたすらに落ちていくのであった。

眠りから覚めると朝があつた。

声の主は何処にも見当たらず、
ただ小さな天窓から淡い日差しが覗き込むだけだ。

それはしかし太陽の光ではないのだということは
青山にも分かった。

あれからどれぐらいの月日が流れたのか。

彼は来る日も来る日も、この白いソファの上で目覚め、眠り
一日に4度ある食事を、お腹が空いていようがいまいが
規則正しい時間に、口を開かされ
チューブを伝い落ちて来るそれを強引に摂らされた。
それはフォアグラを作る作業に酷似していたのだが、
完璧にカロリー計算された食事であるらしく
青山は以前にも増し、理想的体型を手に入れていたのである。

運動も強引に行われた。

全てはこのソファの上で。

その中には時に限りなく性行為に近いものもあった。
ただ、青山にはその相手が誰であり
どのようなことが自分になされているのかは、
まるで分からなかったのだ。

分かるのは、聡明で美しき人の声のみ。

それが佐和子であるのかどうかも、分からない。
しかし青山の身体はその声に激しく反応した。

彼はそれを「悦楽の時」と密かに名づけ

この退屈でたまらない毎日の唯一の喜びとした。

退屈な毎日。退屈な。

ただ、青山が

世間一般の男とは明らかに違う男であるということ、

彼をどうやら監禁しているらしい人物が、

正確に知りえていなかったことは大きな誤算であったようだ。

彼は退屈などしていなかった。

生きる希望もなにもかも、失ってはいなかった。

不平不満は変わらずに大量に持ち合わせていて

レコード大賞が大晦日ではなく

30日に行われることになったことに非常に憤慨していたし、

歴史と伝統ある紅白歌合戦での裸と見間違つかのような

ダンサーの踊りには抗議の電話を40回に渡って

掛けなければと張り切っていた。

その芸能情報を、誰とも接触できないはずの青山が

果たして何処で手に入れたのか――

青山に唯一接触を許されていた女。 メイドの麻由美。

彼の身の回りの世話役に女を一人でもあてがってしまったことが致命傷であることを監禁者が知るのは、どうやらもう少し後のこと
のようだ。

青山マジックは健在だった。

麻由美は彼の為なら既に火の中にも飛び込める勢いなのだ。

そうして恋に堕ちた女は、青山の悦楽タイムを許さない。

麻由美はどうにかして、青山を

この屋敷から出すことを考え始めていた。

「・・・その先にある本当にスィーティな世界を、
わたしと過ごさない？和くん」

甘いものに目がない青山が、
スィーティという言葉に瞬時に反応することを計算に入れた上での
見事な誘い文句であった。

脱出決行の日は 春の七草粥の日と青山は決めた。
クラブ「七草」のママの作る粥を食べないことには
無病息災を真に願うことはできない。

青山は人一倍拘りの強い男であつた。

そしてその拘りこそが、

幾たびも彼を窮地から救い出してきたことも事実であつた。

それ以前に「窮地に追い込まれている自分」というものを
彼が自覚したことなど、

25年という人生の中で一度もないことも
また、事実であつた。

「青山脱出計画執行の日まで、あと・・・」

彼はそれを宇宙戦艦ヤマト風に呟き、テレサではなくメーテルを想
つた。

何処までも脈絡の中途半端な男であつた。

第8話 「escape」

大阪梅田の某百貨店で長年続いている

早朝よりの七草粥のふるまいが今年も滞りなく行なわれていた。

それを伝えるお昼のニュースを、

屑野菜と細切れ肉で作った簡単な炒め物を箸でつつきながら

美津代はぼんやりと眺めていた。

カウンターの上に置かれた

醤油差しの中の醤油が残り少ないのを、慣れた手つきで補充しながら

一年に一度だけの限定メニューとなる七草粥の七草の名前を
順番にそっと呟いてみる。

美津代は、クラブ「七草」のママであった。

青山が失踪してから、もう随分経つ。

月に1度、顔を出すか出さないかの忙しい青山だったが

七草粥の日だけは、どんなに忙しくても必ず店にやってきた。

美津代はそんな青山のために、この日だけは、

いつもより営業時間を延長して彼を待っていた。

ホスト業をしていた青山が、いきなりヒキガエルのような男とこの店にやってきた時には、美津代は酷く驚いたものだ。

まず、青山が女性ではなく男性と共にいる図というものが非常に珍しかったし、

男が青山よりかなり年配であるということも気になった。

それが新しく青山が選んだ職場の上司であるということとその自己紹介から知った時、美津代の胸の中にある強烈な不安が渦巻いたのだ。

「青山ちゃんは、この男に

トトオちゃんの話をするんじゃないかしら・・・。」

そう、美津代こそが「不思議なメルモ」ビデオ全巻を青山に見せ、その魅力に取り付かせた女だったのだ。

彼女が青山につき込んだ金は、計り知れない。

ひと晩に何本もの高級シャンパンやワインを開け、100万、200万という大金を、惜しげもなくこの男のために使った。

青山よりも、20歳も上だ。それは分かっている。

それでも彼女は青山という男に夢中になった。
彼の中の無邪気さ、素直さに夢中になった。

それは、青山を冷静に観察した際、必ず人が辿り着くであろう答え、

無邪気さ〓幼稚

素直さ〓難しすぎる話にはとにかくうんうん頷く癖という、
彼の個性の一部にすぎなかったのだが、

彼女はそれを青山の最大の魅力として捉えていたのだ。

溝川に浮かぶ魚の死骸でさえも、
大海を悠々と泳ぐ鯨に変えてしまう、
それが恋する女であった。

花崎美津代、45歳。

実は青山の携帯に、

「鼻先美津代45 鼻腔：七草」として登録されていることを知らない、

軽く更年期障害の症状に悩まされつつある中で、
せつない片恋の訪れであった。

「今年も青山ちゃんはやってくるのかしら・・・
私の作った七草粥を食べに・・・」

美津代はそうひとり言ちた。

彼女の店がまだ、東京にあった数年前の七草粥の日。
朝から時折小雪が舞っていた、たいそう寒かったあの日。
青山は店にやってきた。
一人で。

そのあまりに端麗な顔を前に 美津代は幼い頃から憧れ続けた
眠りの森の美女をその接吻により100年の眠りより目覚めさせた
美しき王子を瞬時に思い浮かべた。

少し疲れているのだろうか、
伏し目がちにカウンターの席へとついたこの男に、
美津代は

年末年始の暴飲暴食で相当胃が草臥れているのだらうと、
あとで自分で食べようと思っていた七草粥を作り、
そっと青山の前に置いたのだ。

それが クラブ「七草」の店名改名由来であり、
名物「七草粥」誕生秘話であった。

「・・・これは、なんですか？」

あの日青山は、訝しそくにカウンターに置かれた粥を見つめていた。

「七草粥よ。」

お正月、沢山食べて胃が少しもたれた感じになっているでしょう？

“お疲れ様”と労ってやるために、この粥を食べるのよ。
今日はそういう日なの。”

「…………蓄膿の僕に、なんてぴったりなメニューなんだ…………。
」

「…………え？」

数秒後、この美形の男が

「七草粥」をどうやら

「生臭粥」だと聞き違えたらしいことを悟った美津代は、
それを慌てて否定しようとしたが、別の客につかまってしまい
その機会を失ってしまった。

以後、数年後 青山を追いかけるようにして

美津代が東京の店を閉め

京都の祇園に新しくクラブを開き、

青山がヒキガエル男を連れ其処へ現われるその日まで

青山は七草粥を

「生臭粥」であると信じ続けていたのである。

そして少しも生臭くない粥を啜るたびに、
己の蓄膿さ加減を確認しては憂いていた青山。

青山の蓄膿は、この経緯をもって青山が
勝手に自己判断したものであった。

彼の鼻は常に正常だったのである。いや、寧ろ人並み以上に。

第9話 「escape2」

その人並み以上の鼻の力で、今、青山は
佐和子の香りを嗅ぎ分けていた。

確かにドア一枚を隔てた壁の向こう側に　今　佐和子がいる、
青山はそう確信していたのだ。

ソファ。

此処に眠らされてからというもの、青山は己の意思で
身体を動かすという動作を非常に物憂げに感じるようになっていた。

ただ、唯一の場所を除いて　彼の身体は常に気だるさを感じていた
のだ。

唯一の場所

——それをここに固有名詞を用いて表記することは適わない。
よって、中国人に多い名前を二度連続して叫んでみた、
そういう場所であるとだけ　添えておこう。

「ああ・・・陳さん！

陳さんは今、どうしているのだろう！

陳さん・・・！チンチンさん！！！」

青山が唐突に、青梗菜料理を作らせたら右に出るものはいない
中華料理「チンチンのチンゲンサイの館」の店主

陳 陳好を思い出してしまったようだが、
物語を先に進めよう。

佐和子はどうやら、メイドの麻由美と話をしているようだった。
青山の必殺地獄耳がその威力を発揮できるのは
女性同士の会話の盗み聴きの瞬間だけだ。

今がまさにその瞬間であった。

彼の聴力レベルは最大値にアップした。

「七草粥・・・？」

「はい、そうです。今日は七草粥を食べる日でしょう？」

「あら・・・そう言えばそうだったかしら。」

うちにはずっと、そんな習慣はなかったから・・・」

「人質は連日の強引な食事に精神的に参っていて、
胃が痛いと訴えています。」

今日は彼に七草粥を食べさせてはいかがでしょうか。」

「食べさせるといっても・・・食事の管理は私がやっているのではないし・・・」

「彼が毎年通っていたというある店があります。」

彼はその七草粥を食べることを、

とても楽しみにしていたようなのです。」

「・・・そんな込み入った話を彼としているの？麻由美さん。」

「あ・・・しているというか・・・」

・・・彼が勝手に滔々と語ってくれたというか・・・」

麻由美は思わずヒヤリとした。

青山が勝手に滔々と「七草粥とボク」というタイトルで

クラブ七草のママ美津代との今日までの経緯を

2時間45分に渡り、滔々と語ってくれたのは事実ではあるが、

そんな滔々と昔話を語り続ける青山に対する、

自分の中の特別な感情を、

佐和子に見透かされそうになったのを感じたからだ。

同時に、それを見透かすことができるということは

佐和子自身も

青山になんらかの特別な感情を持っているのではないかと

麻由美は思った。

それはまさに女の勘であった。

そして佐和子もまた、女の勘により

麻由美が青山に確実に恋心を抱いていることを瞬時に悟っていた。

「そのお店の名前はなんていうの？何処にあるの？」

私が行って、特別にその粥を分けてもらってきましょう。」

「え！？」「ほえーっ！？」

佐和子のその言葉に麻由美も、

ドアに耳を押し当てて聞き耳タイム中であつた青山も、同時に素っ頓狂な声を出した。

そして青山のその素っ頓狂な声は

アメリカザリガニのコンビの片割れの如き高音で

ドアを突き貫けてしまったため、

しっかりと佐和子の耳まで届いてしまった。

刑事とは思ひ難き、どこまでもドン臭い男であつた。

「・・・やっぱりね。大方二人で逃げる方法でも探っていたのでしょう。」

それにしては幼稚で浅はかな作戦ね。笑ってしまうわ。」

「・・・・・・・・・・。」↑麻由美

「・・・・・・・・・・。グジュツ（鼻水）」↑ドア向こうの青山

「麻由美さん、貴女　甘いもので青山くんを誘つたわね。」

図星をさされた麻由美はひどくうろたえた。

ドア向こうの青山もひどくうろたえた。

「あわわ」と声まで出す始末だった。

「青山くん、そこで聞いているのでしょから教えてあげるわ。この女は、毎食時、何処で食べるにも

MY七味唐辛子を持参しているようなそいう女よ。

この世で一番嫌いなものは、ケーキや和菓子といった甘いもの。

唯一食べられるのは、葉の塩っぱさを頼りにできる、さくら餅だけ。

貴方の大好きなキンツバなんて、この女にしてみれば天敵なのよ。」

ガーンガガーンガガンガラガッシャ……！

ドアの向こうからそのような効果音が、佐和子と麻由美の耳に届いた。

それは青山自らが発した、

受けた衝撃を文字に変換したらしい心の叫びだった。

まだ若い麻由美には気づかない。

しかし、佐和子はしっかりと気づいていた。

青山が発したその効果音の節は、「国松さまのお通りだい」の

オープニングテーマの冒頭であるということに。

「いいわ、青山くん。

どうしてもその粥が食べたいのなら

私が行って貰ってきてあげる、その店まで。

それでいいでしょう？」

国松さまのお通りだい オープニングテーマ。

それは佐和子の初恋の人が、

よくカラオケで歌ってくれた思い出の曲だった。

5歳年上のその初恋の相手が歌う国松のテーマと、

以後つきあった、一回り以上年上の彼が歌う国松のテーマの冒頭が微妙に違うことに激しい嫌悪感を抱いたことも、今となっては懐かしい。

そして胸毛が苦手な佐和子の天敵、西城秀樹が

違和感国松世代であることも、入手済みの情報だった。

佐和子は初恋の彼が歌う、国松のテーマ冒頭が大好きだった。

そして、今、青山が口ずさんだそれは、まさしくその冒頭であった。

佐和子の胸が少女のようときめく。

京都の町を 手を繋いで彼と歩いたあの日々を、

鴨川の辺を三条大橋を、四条河原町を、祇園を。

彼女はふいに再び歩いてみたくなった。

そう、ドアの向こう、

激しくすすり泣いている 子供のような、青山と。

全てを暴露された麻由美は、苦々しげに佐和子を見た。

美しいこの女は、ようやく見つけた辛党女の幸せまでも
一瞬で奪ってしまったのだ。

（久し振りに本気になれるかもしれないと感じた男だったのに・・・
）

麻由美はいつか、青山を激辛チキンカレーに挑戦させ
真の辛党男へと生まれ変わらせるつもりだった。

それが青山に肥溜めに落ちた鶏という幼き頃のトラウマな思い出を
呼び起こさせるものであることなど、麻由美は知る由もない。

（激辛道、それが私の生き甲斐となりつつあったのに、
それをこの女は・・・許せない・・・！）

麻由美は廊下に飾ってあった相当な重さの花瓶を
片手でひょいと掴みあげると、そのまま佐和子に向かい
まっすぐに振り下ろした。

「きゃあ・・・！！！！！！」

ザンジャババンバンバン！

ジャンジャババンバンバン！

ジャンジャババンバン、

ジャンジャババンバン！

ザバザババンバンバン！

その懐かしいメロディ（のみ）が、

ゴレンジャーのテーマであることに佐和子が気づくのと、

ドアを突き破った青山が

目の前に現われるのが同時であつたことに

佐和子は非常に驚いた。

それは、あの鈍足だつた青山とは思えない
敏捷な身のこなしだつたからだ。

「やめるんだ！麻由美っち！」

青山は両手で花瓶をはっしと受け止めた。

「あ・・っ！」

まるで青山のでたらめなゴレンジャーテーマの歌詞はこの瞬間を予期してでもいたかのようだ。
彼は花瓶の中の水を頭からドバシャーンと被ってしまったのだ。

青山は全身を花瓶の水に浸しつつ、麻由美を見つめた。
青山の髪から滴がぼたりぼたりと落ち、
それはまるで青山の眸から流れ落ちる涙のようにも見え、
麻由美は言葉を呑み込み、その美しい滴に心奪われた。

まだ完璧とはいいがたい青山の身の動きではあった。
しかしながら、完全にもう相手は戦意を喪失している。

笹垣がもしここにいたならば、
「出よったで・・青山マジックが」と呟いたことだろう。

だが、今 此処にいるのは 笹垣ではなく佐和子だった。

佐和子が叫んだ「青山くんっ、大丈夫！」という声と
それに照れながら応える青山の「大丈夫ですよっ！」という
やたら嬉しそうな声が、麻由美の意識を引き戻してしまう。

「・・・ひどい、和くん、この女を庇うの・・・!?!? 私より、この女がいいの? そうなの? そうなのね!?!」

再び荒れ狂いだした麻由美は、花瓶を手にとると、ものすごい勢いで振り回しながら佐和子と青山に向かってきた。

「きゃーーーー!」

「危ない! 佐和子さんっ!!」

女子重量挙げ選手権 山形大会

——腹痛の為決勝棄権で準優勝——の経歴を持つ

原田麻由美 が、

たとえばこの先も青山の傍にすることを許される女となれたなら、おそらくはその名を

「腹だ 麻由美」と携帯に打ち込まれる運命であつたろう。

けれどどうやらそれは、叶わない未来のようだ。

「逃げましょう! 佐和子さん!」

「え!？」

青山は佐和子の手を取った。

佐和子に目配せをすると、青山は左右を見渡した。

左に、長く長く、気が遠くなるほどに長く続く螺旋の階段がそこにあつた。

しかし青山は佐和子を抱きかかえると、躊躇うことなく

一気にその階段を昇り始めた。

「・・・青山くん・・・!？あ・・・貴方一体・・・!？」

驚いていたのは、佐和子だけではない。

小さくなつていく青山を見上げる、

麻由美の寂しそうなさよならの視線を背中に感じながら、

青山も、とても驚いていた。

これが、あの夏の日、小鹿のように庭を駆けていく佐和子さんにまるで追いつくことができなかった尺取虫の僕か・・・
なんだか自分の身体じゃないみたいだ。

エネルギーに満ち満ちている、そんな気がする・・・

心なしか、頭で組み立てる文章までもが
洗練されてきたような気がする青山であった。

うおーーーーー！

「キャシャーンがやらねば、誰がやるですよ、佐和子さんっ！」

青山はそう叫ぶと、よりいっそうにスピードを速め
階段を駆け上がる。それはもう超人的なスピードであった。

遅しくなった青山の腕に抱かれながら、
佐和子は何度も叫んだ。

「止まって！戻って青山くん！お願い、戻って！
まだ・・・まだ早いのよ・・・っ！！！！！」

その悲痛な声は、興奮した青山の耳には　まるで届かない。

第10話 「fearfulness」

青山は、佐和子を抱きかかえたまま
殆ど息を切らすことなく螺旋の階段を昇り切った。

「♪ 想い出〜〜がい〜〜っぱあ〜〜い」

古い懐メロが突然浮かんできたのは
そこに「螺旋の階段のぼる」という歌詞が含まれているからだろう。

（螺旋の階段のぼる・・・君は今・・・シンデレラさ・・・）

青山はそのフレーズを心で3度繰り返し、
驚いた顔で自分を見上げている、腕の中の佐和子を見つめた。

（佐和子さんは、シンデレラなんかじゃない。
この人の美しさは、午前0時を過ぎてもずっと変わらない。）

青山は、本当は灰被り姫である平凡な女が
魔女の魔法により、美しいドレスに身を包み変身して
お城の舞踏会へと向かう

シンデレラの話があまり好きではなかった。

全ての女性に博愛平等である青山にしてはそれはとても珍しいことだったが、

その理由は、他でもない。

『かぼちやの馬車』にあった。

「僕は食べ物を粗末にする人間は許せない・・・」

かぼちやを馬車に変えた魔女を天晴れと思うことはできても、

食べ物であるそのかぼちやに土足で上がりこみ、

あろうことが尻を置くという

シンデレラの行為には我慢ならなかったのだ。

そしてその上がりこんだ靴を

これみよがしにお城の階段に脱ぎ忘れるシンデレラ。

「・・・あれは、わざとだ。」

青山は、「男は子供が産めない」という事実を

“卒業文集提出の後に自分に教える”という卑劣な行為に出た、

嘗てのクラスメイトの秀才中島の顔を思い出し
とても腹ただしい気分になった。

計算や打算といったものとは無縁の世界で生きている青山にとり、
そういった人間の腹黒い部分には、
本能的に拒絶反応が出るのである。

しかしながら、彼の手柄の全てを
まるで自分の手柄であるように横取りし
密やかに上へと報告し続けていた上司 笹垣勉 の
腹黒さにはまるで気づかない どうにも哀れな男であった。

青山の逞しい腕から地上へと下ろされた佐和子は
軽い眩暈を感じた。

無理もない。常人とは思えない記録的スピードで
螺旋の階段を駆け上がったのだ。

三半規管が悲鳴をあげているのが、佐和子には分かった。

足元がふらふらと頼りない佐和子の細い腰を、
青山は右の手でそつと支える。

その無駄の一切ない流れるような仕草は、

ホスト業で培ってきたものではなく、
青山が生まれ持って得ている才能であった。

おそらく、舞踏や歌舞伎役者といった道を選んでいれば
その才能がいかなく発揮されたのではないかと

佐和子は思ったが、同時にそれは

日本を初めとする各国の伝統文化にとり

致命傷を与えうる結果を齎すことになった可能性もあると
身震いしながら思った。

彼女は伝統文化に触れることが、とても好きだったからである。

「・・・寒いですね。さすが、京都の冬ですね。」

青山がパジャマの襟を立てながらそう呟いた。

着の身着のまま建物飛び出した青山は、
薄いブルーのパジャマ姿一枚という格好であり
しかも先ほど花瓶の水を頭から被っている。

それは記録的スピードで螺旋の階段をのぼった際、
ちょうど洗濯機で言うところの脱水効果と同じ効果を
青山のパジャマに齎していたため、
既に生乾きといった状態にまでこぎつけてはいたのだが。

しかし、いくら人通りの少ない場所であるとはいっても
時折通り過ぎる観光客が青山の姿を見ては、
ひそひそと耳打ちしあうのに

佐和子はさっきから気がついていた。

そういう佐和子も突然青山に抱きかかえられ
出てきたものだから、かなりの薄着だ。

「このままでは風邪を引いてしまうわ。

何処かお店に入って、温かいものでも飲みましょう。」

佐和子がそう提案すると、青山はとても無邪気に喜びながら

「じゃあ、あの店に行きましょう！」

佐和子さんにも是非、ママの「七草粥」を食べて貰いたいですよ！」

と、虫歯も歯石も一切ない、美しく白い歯を見せて笑った。

「そうね。元々その粥をいただきに、
そちらへ向かうつもりでいたのだし。・・そうしましょうか。」

「ほんとですかっ！嬉しいなあ！！」

ママもとっても喜びますよ！僕もすごく嬉しいですよ！」

（あ・・・黒柳徹子・・・）

青山の鼻にかかった「すんごく」が、

まさに徹子のそれであることを瞬時に見抜いた佐和子であったが、
今、それを青山に告げることは、本能が何故か止めた。

佐和子という女は、どうやら人一倍、

自衛能力に長けている女のようにであった。

青山に向かい“黒柳徹子”の名を出したが最後、

「徹子の部屋」歴代ゲストを第一回目放送から順に

佐和子が本気で怒ってやめてくれと懇願するまで

青山が滔々と語りだすという拷問のような時間が待っていたからだ。

そしてそれは既に、笹垣が3度体験済の時間であった。

「ところで、そのお店は何処にあるのかしら？」

「祇園ですよ。えーと・・・今、此処は京都の

一体どのあたりなのでしょうかねえ・・・？」

青山はあたりをキョロキョロと見回しながら、

なにかヒントになるものはないかと探した。

「大原三千院の近くよ。

左京区だから祇園まではかなりあるわ。
タクシーを使いましょうか。」

「え．．．．？」

（この辺りには、大原さんがそんなにも沢山住んでいるのか・・・！）

青山は、長く監禁されていたあの建物にいる間、
一度だけメイドの麻由美に見せてもらった
たらこキューピーのCMを何故か唐突に思い出した。

犇めき合ったらこ共が、ゆっくりゆっくり自分へと向かって歩いて
くる。

やたら耳につく歌を延々と唄いながら・・・

青山はその恐怖に叫び声をあげ、
麻由美にテレビを消してくれるように懇願したのだ。

あの恐怖は、笹垣に昭和の初めから営業している古い喫茶で
あるUFO打ち落とし侵略ゲームを見せられた時に感じた
あの戦慄、そのものだった。

インベーダーゲームと呼ばれるその世にも恐ろしいゲームが、
その後長く、青山の夢へと現われては
快眠が特技の青山の睡眠時間を悪夢により大幅に削減したことは、
青山の中で、まだ記憶に新しい。

それが最近、キューピーたらこのあのCMに、
取って代わろうとしていることを、青山は感じていた。

（あのたらこは、とても怖い・・・
昔、クラスメイトの里佳子ちゃんの部屋にあった
青い目のフランス人形の服を裸にして、
手足の向きをそれぞれ明後日の方向に向けたまま
床に放置した時に感じたあの恐ろしさと同じだ・・・）

青山は里佳子ちゃんの部屋の絨毯に
失禁と、そこに溺れるフランス人形マーヤを残したまま、
逃げるようにその家をあとにした
あの幼き日のことを思い出して涙ぐんだ。

「佐和子さん！一刻も早く ここを立ち去りましょう！！
大原さんが全員で、作業苦を理由にタケシを呼ぶなんて
恐ろしすぎますっ・・・！！！！」

「な・・・なにを言ってるの？青山くん・・・？
貴方、何故泣いているの・・・？タケシって誰なの？
どうしたのよ・・・！？」

「説明している暇はありませんっ！地球のジジです！
僕らのジジなんですよ！！！！」

魔女の宅急便の魔女の方の名で憶えていた
難しい言い回しを、

恐怖のあまり黒猫の名で佐和子に叫んだことに
青山ではなく、賢明な佐和子が気づいたことは奇跡に近い。

パニックに陥っている青山に代わり、
佐和子はタクシーを探した。

「青山くん、あの通りまで出れば・・・」

佐和子がそっぴいかけた瞬間、彼女の身体は宙にふわりと浮いた。

再び、佐和子を抱き上げた青山が走り出したのである。

「あ……青山くん!？」

無理よ……!ここは大原よ!？」

祇園までどれぐらいると思っっているの……!？」

「たらこ……たらこ…… たつぷり…… たらこ……!」

泪と鼻水と涎でぐちゃぐちゃになった顔で、

それでもなぜか、呪文のように たらこの歌を歌い続ける

パジャマ姿の顔だけは特別にいい男と、美しすぎる女の逃避行は、

その日の夕方、たまたま大原三千院で口ケ中であつた

MBSテレビで放送されている情報番組

ちんぷいぷいの中で偶然にも撮影され

国民に大きな不安と謎を与えた。

それをたまたま、聞き込み捜査中という名目で、
インベーダーゲームに高じていた刑事笹垣が目にしたことも
これまた偶然であるといえるだろう。

「・・・やっぱり生きとったか、青山よ。」

すっかり冷めた珈琲を啜りつつ、
笹垣は口の端っこだけでにんまりと笑った。

それは飲んだ珈琲を順次、
口の端っこから滴り落とすことになるのだということとは
まるで計算外だった様子の、

どうにも哀れな男であった。

第11話 「jealousy」

美津代がそろそろ店を開けようかと思っていた
午後5時半頃、その電話は掛かってきた。

「はい、クラブ“七草”でございます。」

こういう忙しい時に掛かる電話がろくな類でないことに
美津代は受話器を取ってから気づいたのだが、もう遅い。

受話器の向こうで話し出したその声を聴いた瞬間、
美津代はうんざりとした気持ちになった。

声の主はヒキガエルだった。

—— いや、笹垣であつた。

「あー・・・久し振りですな、美津さん。ワシですわ。
今、ちょっと宜しいですか？」

カエルの尻にストローを突っ込み思いつきり膨らまし、
パーン！と勢いよく破裂させるという残酷な遊びに高じていた
子供時代の美津代の兄のことを、
美津代はその声から唐突に思い出し、吐き気を催したが
努めて明るい声で、笹垣の問いかけに応じた。

「いえいえ、忙しいで、猫の手も借りたいほどですわあ。
悠長に電話で喋ってる暇、とてもあらしまへん。」

普通の客であれば、美津代の爽やかきつちり拒絶攻撃に
苦笑しつつも「ママには敵わないなあ」と退散してくれるのだが、
蠅取り紙級粘着質男笹垣には、まるで通用しないようだった。

勝手に話を続け出す笹垣に、美津代は舌打ちしたい気持ちになる。

「チッ。」

思わずしてしまったようだ。しかもご丁寧に3度も。

しかし笹垣は平然としている。

「それはそれは。商売繁盛してるようで、ええこつちやですな。
なに、お時間は取らせませんよってに。」

ただ、少々頼みたいことがあるんです、美津さんに。」

美津代は笹垣のこの“美津さん”という呼び方が気に入らなかった。

いや、笹垣のなにもかもが気に入らないのだが、
こう呼ばれた瞬間、身体中の毛穴が開き、
産毛という産毛が総毛立つ気がするのだ。

事実、下の毛も下着を突き破る勢いで、起立していることに
美津代は気づいていた。

「頼みたいことで・・・。
まさか、また タミコはんの浮気調査を
手伝ってくれとか言うんやおまへんやろうねえ。」

笹垣は嘗て一度、一人でこの店にやってきたことがあった。
憔悴しきった様子の笹垣の様子に、
これはただ事ではないと察した美津代は、咄嗟に店の女の子に
「美津代は死んだ」と笹垣に告げるよう言い残し
カウンター奥へと引っ込もうとしたのだが、

笹垣は既に、美津代の姿を捉えていたらしく
店の女の子の「ママは死にました。」の言葉に
口の端っこだけでにやりと笑うと、
「そうか、そら残念やったな。」

青山の写真を数枚、持ってきたんやけどなあ。」と言ったのだ。

笹垣のその言葉を聞くや否や

カウンター奥から疾風のように飛び出してしまった自分を
美津代は後々まで悔いることになるのだが、

なにより腹ただしかったのは、

笹垣が美津代に見せた写真が、

“ 紳士服あおやま ” の新作スーツ数点の写真だったことであつた。

（いつか雑巾絞り汁入りウイスキーを飲ませたるんやから。）

美津代が虎視眈々とその機会を狙っていることを

笹垣が知っているかどうかはともかくとして、

その時笹垣が美津代に依頼したことというのが、

笹垣の妻、タミコの素行が最近どうもオカシイので

男がいるかどうかを、調べて欲しいというものだったのだ。

（あの、今年の干支そのものみたいな女に

男の影などあるはずもないのに、あほとちやうやるか。）

美津代はその時の笹垣のなんとも情けない顔を思い出し、

同時に二度ほど店に連れてきた、笹垣の妻、タミコの

食べる時にくっちゃくっちゃねっちゃんねっちゃんと

音をさせる癖を思い出し、実に不快な気分になった。

「いやいや、タミコのことではえろう世話になりましたな。時々仕掛けてみては、寢床でバカ笑いされてはいますが・いや、それはこっちの話ですわ。」

今は、夫婦仲も安泰ですよってに、どうぞご心配なさらんとしてください。にんまり。」

自分が受話器の向こう側で微笑んでいることを美津代に知らせるために、わざわざ声に出し“にんまり”と呟く男が何処にいるだろうか。

美津代は鳥肌がサブイボに変わるのを懸命に堪えながら「そら良かったこと」と投げ遣りに答えた。

「で、要件はほななんですのん？そろそろ店も開けなあきまへんよって、はよう言つてもらわんと困りますんえ。」

「ああ、これはえらいすんません。ほな、手短に話します。」

最初からそうして欲しいものだと思しながら、カウンターの灰皿を手繰り寄せた。

「今日は、七草粥の日、そうですね、美津さん。」

煙草に火をつけようとしたその手を、美津代は思わず止める。

「もうすぐ、青山がそこへ行くはずです。」

美津代の鼓動が早くなった。

“青山” その言葉を聞くだけで、こんなにも動揺している。45になる女の何処に、このような情熱が潜んでいたのかと美津代は自分に驚きながらも、用心深く言葉を選びながら笹垣に問うた。

なんといっても一度、「紳士服あおやま」にやられているのだ。

「・・・あおやまで。今度は“珈琲の青山”とか言っんやおへんやろね。」

「青山和彦、ですわ。」 笹垣は淡々とその名を出した。

「・・・ほんまに？」

「角さんファンの美津さんなら、当然ちちんぷいぷいを見てると思うてたんですけどな。見はりませんでしたんかな？」

「・・・今日はたまたま。なんですか？その番組がどないしましたん？」

「番組中継中に、青山が画面に映ったんですわ。」
「・・・え！？」

「角ちゃん・・・」

「違った、青山ちゃん・・。」

生きていたのだ。生きていてくれたのだ。
美津代の両の目から大粒の涙が零れた。

——生きていた、青山が。

もしかすれば最悪な結果と共に、
いつか彼と対面しなければならぬのではないかと思っていた美津代は、

先日喪服の新調を終えたばかりであつたし、
知り合いの葬儀屋に、近々葬儀をひとつお願いするかもしれないと
電話も入れたばかりであつた。

『今さら人に聞けない一般常識』という本を密かに購入しては
お焼香のマナー、香典金額などを具に調べもしたし、
青山記念碑の「ハカ」の文字に金箔を施すかどうかで
ひがな一日思案してみたりもした。

それらが全て取り越し苦労であつたことが
たまらなく嬉しい。

その取り越し苦労がどれほどに、
人として非情な行動であるのかには

気づかない美津代であつた。

「奴は、女と一緒にしたわ。抱きかかえて走つとりました。」

笹垣のその言葉に、美津代は出していた涙を残らず涙腺の中にズズズビビと引き戻した。

「・・・女、と？」

「一瞬映っただけでしたが。」

多分ワシの思つてる女と一致するんやとは思いますが、これがたいそう綺麗な人でしてな。

ハツとするほど美しい。相変わらずモテよりもすな、青山は。」

「・・・・・・・・。」

私がこんなにも心配していたというのに、青山ちゃん是他の女とイチャイチャしながら、あんじょうよろしくやっていたというのか・・・！

美津代の腸が、吹きこぼれた粥のようにグラグラと煮えたぎる。

笹垣はその様子を受話器越しに窺いながら、
口の端だけでやはり、にんまりと笑った。

（女の嫉妬心ほど、使えるもんはない。
うまく利用すれば、頼りにならん部下なんぞよりも、
これ以上ないぐらいの働きをしてくれる。）

笹垣は、平静を取り繕おうとして
故小渕首相が「平成」の文字を紹介していた
昭和が終わった日の話を訥々と語り始める美津代に
静かに告げた。

「必ず今夜、青山がその女を連れて“七草”を訪れるはずです。
美津さん、あんたにはその女と青山の会話の一部始終を
盗聴してもらいたいんですわ。ええですかな？」

言われるまでもない。

美津代の手にはすでに、盗聴器がしっかりと握られていた。

それは嘗て、笹垣が

タミコ浮気疑惑事件の際、少ない小遣いはたいて購入し
美津代に渡した盗聴器、そのものであった。

第12話 「i n d i c a t e」

笹垣が『七草』を訪れたのは、
ちょうど美津代がそろそろ店を閉めようかとしていた
午前3時頃だった。

「あー・・・もう閉店ですか。」

カウンター付近に僅かに残る店の灯りの中で
ぼんやりと煙草を吹かしている美津代に向かい
笹垣は呟くようにそう言った。

美津代は笹垣を振り向きもせず、
「まだ、いいですよ。粥でも食べはります？」と
素っ気なく応えた。

それでも美津代が笹垣が注文する前に
なにか食べるか？と訊ねることなど
非常に珍しいことだった。

「そつやな・・・ほな久々に貰いましょうかな。」

笹垣がそう答えると、美津代は大儀そうに腰を上げ
銜え煙草のまま鍋に火をつけた。

笹垣はそんな美津代の様子に
視線を下から上へとじつくりと這わせ、
美津代の目尻から0・5センチ下あたりまで行った時点で
またゆっくりと足の方へと視線を下ろした。

目が合った瞬間に、

田代まさし盗撮事件や植草手鏡事件について

美津代が語りだす恐れがあることを懸念した為である。

何処か自分の視線に変態チックな香りが潜んでいることを
笹垣は本能で知っているのであるうか。

解せない男であった。

笹垣はカウンターの隅に腰をかけた。

隅っこが大好きな男だったが

青山と共に行動すると、常に彼に

隅っこの席を奪われることを不服としていた。

隅っこにいる青山の足元へ、

ハンカチや口紅や財布や、時には551蓬萊の豚まんなど

ありとあらゆるものを転がしてきては

彼とコンタクトを取ろうとする女どもの輪に囲まれることを
更に不服としていた。

(・・・まったくワシを隅に座らせてくれりゃ

アイツがどれほど女に囲まれてキヤーキヤー言われてようがお構いなしに酒が飲めるっちゅうのに・・・)

つつい元来の世話好きが顔を覗かせてしまふ笹垣は

女どものセーターにできた毛玉や、

枝毛のできた後ろ髪の先などを

丁寧処理してしまいたくなるのである。

美津代は2本目の煙草に火をつけた。

カウンターの上の灰皿には、既に数本の吸殻が残っている。

これまで、美津代が続けて煙草を吸う姿を見たことがない笹垣は、美津代のその仕草で、

青山はどうやら加納佐和子とこの店を訪れたらしいことを察した。

そしてそれが美津代にとり、

あまり面白くない青山との久々の再会となっただけのこと。

「やっぱり美味しいですな。美津さんの作る七草粥は。」

笹垣はわざと、

青山とはまるで関係のない話をした。

美津代は笹垣から少し離れたカウンターの丸いすに腰を下ろすと
「ふ・・」と自嘲気味に笑ってみせた。

「それは七草粥やおまへん。」

「・・え？」

「七草粥やおまへんと言ったんです。」

「・・そやかて。ワシには粥に見えますがな。」

笹垣は一瞬、美津代が粥に毒でも仕込んだのではないだろうかと
ヒヤリとした。

常にふふんがふんと、まずは二オイを嗅いでから
物を食すようにしていたというのに、
今日に限ってそれをするのを忘れていたのだ。

笹垣の心境は、今、武士の一分だった。

木村拓哉扮する毒見係、三村新之丞の気持ち、そのものだった。

席を立ち、トイレへと駆け込み胃の中のを一刻も早く出してしまわねばと、笹垣は焦った。

「サバまた。」

焦りすぎて「せばまた」という山形県鶴岡市のお国言葉を言い違えてしまったことに、笹垣は気づかない。

美津代は、顔面蒼白で立ち尽くす笹垣を胡散臭そうに見上げると、

「鯖なんかあらしまへんえ。

ちよっと人がやさしゅうしたら、すぐそれや。

こんな時間に食べたら、そのでっかいぶよぶよしたお腹が
ますます出るだけとちやいますのん。

今度はほんまにタミコはんに浮気されますえ。

それでも、粥だけでは足らん言いはりますんかえ？」

と、うんざりとした様子で吐き捨てるようにそう言った。

美津代のその言葉に、

どうやら粥に毒は仕込まれていないと判断した笹垣は
ようやく安堵の溜息を漏らした。

「美津さんも人が悪い。」

ワシはてつきりこの粥に毒でも仕込んであるか思つて
えろう焦りましたで。」

「毒？失敬なこと言いはるわ。」

まあ、そのへん歩いotta猫捕まえて

あの女の粥の上で、ざりざり猫の毛掻き耨つて
フケと蚤とたんまりと盛つてやりましたけど。」

「・・・・・・・・・・。」

笹垣は悲しそうな瞳で、目の前の粥を見つめた。

「でもね、笹垣さん。」

あの女はその粥を、なんだかんだでうまいこと
青山ちゃんの粥と交換してしもうたんです。」

忌々しいといった表情で、美津代は笹垣にそう言った。

「あの女・・・言うんは、青山と一緒に
今日此処へ来た女ということで宜しいんですかな？」

暫しの沈黙が、小さな店『七草』を包み込んだ。

青山は午後１０時を回った頃、
『七草』にやってきた。

青いパジャマの上に“新撰組”と書かれた羽織を着て、
風林火山と書かれた鉢巻をしめながら。

懐かしい青山の、王子のごときスマイルに
美津代が年も忘れて駆け寄り抱擁しようとしたその瞬間、
青山の肩越しに微笑む、その女を見たのだ。

美津代がこれまでに見たどの女よりも
美しいと認めざるを得ない、女を。

「・・・なんですね、あの女は。」

美津代は力なく呟いた。

「加納佐和子 34歳。ピアノ教師をしとる女性です。
最もここ半年ほどは、教室の方は閉鎖しとるみたいですけどな。」

「・・・ピアノ教師・・・。」

美津代は小学校6年生までピアノを習っていた。
好きでもないのに、親に無理矢理習わされたピアノ。

美津代はお稽古事の日がたまらなく苦痛だった。
ピアノという楽器が大嫌いだった。

「ピアノの教師やねんね・・・あの女は。」

美津代の心の中で、説明できない感情が
トグロを巻くように居座るのが分かる。

青山が特別に優しい目をして、
彼女を見つめていたことを思い出し
美津代は叫びだしたような気持ちになった。

「セリ・・・ナズナ・・・ゴギョウ・・・ハコベラ・・・
ホトケノザ・・・スズナ・・・スズシロ・・・」

粥を前に歌うように呟いた、あの女。

「笹垣さん・・・」

「うちは今日、蕪を買っつんを忘れてしもうたんです。」

溜息と共に美津代の吐き出した煙が、

彼女の髪に絡みつくように漂う。

「その粥には、“スズナ”が抜けてます。

正しくは、七草粥やない、『六草粥』なんです。」

「なんや、そうかいな・・・」

そんなもん、言われてもワシには分かりませんがな。

黙っつつてもええことですよ、美津さん。」

再びドカリと椅子に腰を下ろした笹垣は

粥の続きを啜るべきかどうかで思案したのち、

猫の毛のフケは許せるにしても、蚤はどつなのかという結論に達し、そのままさりげなく、粥を美津代側に精一杯押しやった。

笹垣にできる、それがギリギリの
美津代への抗議の意思表示であつた。

美津代は、黙つて笹垣の押しやった粥碗を片付けると、新しい碗に粥をたっぷり注ぎ入れ、再び笹垣の目の前にそれを置いた。

それは、ハローキティの碗であつた。

円らな瞳で、自分を見つめるキティの愛らしい表情が
笹垣の中枢神経を刺激する。

フケか、蚤か、キティか、サンリオか。
笹垣は激しく揺れた。

なんとか正気を保ち続けていられたのは、
それがキティであつたからであろつ。

（キキララかマイメロディ出されたら危なかったな・・・）

笹垣は額につすらと滲んだ汗を手の甲で拭った。

美津代は笹垣が粥に手をつけないのを見て、戸棚の奥からまた新たに椀を出した。

笹垣はその椀に描かれた絵柄を見て、思わず善がり声を上げてしまう。

それは、パティ&ジミーの茶碗だったのだ。

笹垣が負けた。

何故か嗚咽状態で、粥を流し込むように口に運ぶ笹垣を
美津代は虚ろな目で見つめながら、独り言のように呟いた。

「・・・加納佐和子は、青山ちゃんに
サラリとそれを言ったんよ・・・」

“これは七草粥じゃないわ、蕪がないから六草粥ね”

粥を見た瞬間、
食べてもいてへんのに、そんなん分かるもんやの？
でも、あの女は確かに青山ちゃんにそう言っで・・・そう言っで・・・
。。」

「はつきりとうちの顔を見ながら
“老け顔女がフケ粥とは、たいそうなご挨拶なこと” って……
！」

そう言う和美津代は、堪えきれなくなったのか
肩を震わせて激しく泣きじゃくった。

号泣する齡45の女を前にして、
笹垣は嬉々として、パティ&ジミー碗の粥を啜った。

（はあはあ……ワシはなんでも
おさげ髪の人に弱いんや……）

笹垣は女学校時代のタミコのおさげ髪を思い出し、
沸き出づる欲情を持て余しつつ、
熱い粥を一気に流し込んだ。

「加納佐和子がこの店で、
果たして青山になにを語ったのか。

全ては美津さん、
あんたが仕掛けてくれた、盗聴器が教えてくれますやろ。」

僅かに残る刑事の理性を笹垣は懸命に煩惱を掻き分けて
前面に押し出した。

口の端から、

蚤の混じった六草粥がぼたりぼたりと滴り落ちるのも構わずに、
笹垣はにんまりと 椀のパーティ越しに泣きじゃくる
美津代に向かい微笑みかけるのであった。

第13話 「i n f o r m e r」

笹垣は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

事実、本当に口の端っこで小蠅が息絶えていて、それを知らずにクツチャクツチャと
先程から噛み潰している笹垣だったのだが、
愚鈍な彼はそれには気づかない。

左耳に赤ボールペンを引っ掛け、右耳には青ボールペンを引っ掛け、
右手に黒ボールペンを、左手にサクラのマイネームを持ちながら、
笹垣は腸が煮えくり返るような気持ちで、
美津代が仕掛けた盗聴器から流れる、青山と佐和子の会話の
28回目を聴いていた。

それは何度繰り返し聴いても、
卓袱台を斜め45度に襖に向かって放り投げたいほどの腹ただしさ
を

笹垣に運んでくるのだが、
にも拘らず、彼は今日も事務所につくなり、
それを聴いてしまったのだ。

そのことが、彼にはなによりも腹ただしかった。

「・・・でね、佐和子さん。」

やっぱり僕はアルプスの少女ハイジは、
ゼイゼイマンさんがいなければ、名作にはなりえなかったと
思っんですよっ！」

「・・・青山くん、申し訳ないのだけれど、
ハイジ内のゼイゼイマンさんという人物に私は憶えがないわ。」

「え・・・！？ゼイゼイマンさんですよ！
クララのお父様じゃないですか、佐和子さん。」

「・・・ゼーゼマンさんのことだったのね。」

「そう！そうです！そのゼイゼイマンさんです。
おでこが愛らしいゼイゼイマンさん、好きだったなあ。
ダンディ＆ジェントルマン。僕の理想のサラリーローンですっ！」

「・・・サラリーマンと言いたいのね。
それ以前に、ゼーゼマンさんがサラリーマンかどうかも
疑わしいところなのだけれど。」

「彼の素晴らしいところはですねっ！佐和子さん！
なんとクララに会いに家にやってくる時には、
まったく同じ声と同じ笑顔で、クララに挨拶することなんですよ！
いやあ、娘を本当に愛しているんですよね！
でなければできない神業だと僕は思っんです！」

「・・・青山くん・・・。夢を壊すようで大変申し訳ないのだけれど、

それは同じシーンを使いまわしているっていうだけの話なんじゃないかしら・・・。

古いアニメーションではよくある話で・・・。」

「ゼイゼイマンさんだけじゃないんですよ！

クララの“ パパア！おかえりなさい！” も

輝くばかりの笑顔も、いつもまったく同じなんです！

あの親子は本当に凄いですよ！！」

「・・・そうかしら。

娘の足がもうすっかり治っていて、

本当は立って歩けるにも拘らず、長年放置し続けたことは、育児放棄と取られても仕方のない大罪だと思うわ。」

「・・・その話はよしましよう、佐和子さん。

美しいアルムの山を背景にして、相応しくない話です。

ダークなのは、セバスチャンだけで充分ですよ。」

「セバスチャンのどこがダークだって言うの！？」

「ダークですよ！彼はダークです！

だって・・・だって、きつと僕のチネッテとできているに
違いないんですから！」

「チネッテ・・・？ああ、あのツンとして意地悪そうな
ゼーゼマン家の召使い女のことね。」

「彼女は素晴らしいですよ。彼女ほどの女性は
何処を探してもそう見つかるものじゃありませんよ。」

「・・・さつきは、フネさんほどの熟女はいないって
森光子なんか目じゃないって、そう熱弁してなかった？青山くん。」

「フネさんのフェロモンは普通じゃないですよ！
既に還暦を越えていると世間に思わせておいて、
だけど本当はまだまだお若いんですから！

まだ40代だとかって噂もあるくらいなんです！
40代ですよ！？ドモホルンリンクルですよ！？
あんな離れ業は誰にでもできるものではありませんよ、佐和子さん。

でもね、僕はよしこ先生は、どうかと思うんです！」

「急にド根性カエルを持ちださないでちょうだい！
梅さんを思い出して胸がきゅんとなるわ・・・。」

「梅さん・・・佐和子さんは、梅さん派なんですか！？
教師生活25年の町田先生じゃなくて！？

・・・佐和子さんの男の趣味が、僕にはわかりません・・・。」

「・・・私も貴方の女性の趣味が分からないわ、青山くん。」

笹垣は飲み終えたペプシコーラ缶に、

サクラのマイネームペンで、「あほんだら」と大きく書いた。

ワナワナと唇が震えているのが分かった笹垣は、自分を落着かせるために、昆布茶を入れ、

ロツテコアラのマーチと一緒にそれをゆつくりと楽しむことにした。

彼は器用に口内で、コアラのマーチを半分に分けると

舌先で中のチョコ部分だけを根こそぎれるると嘗め尽くした後で、

サクサクとしたクラッカーの食感を味わい、

昆布茶で口の中に残った菓子屑を喉の奥へとゴクリと流し込んだ。

笹垣のそんな様子を見ていた部下の神埼が、そつと笹垣に声をかけた。

大音量で事務所に、連日流される

青山と佐和子の盗聴器に残された、本当の意味で謎の会話は、もう空で言えるほど、神埼もすっかり憶えてしまい、

「お呼びでございますか、ロツテンマイヤ様」の台詞と共に突如脳内に現われるチネツテに日々驚かされ、

もはや通常業務に支障が出る有様だった。

「笹垣さん・・・脱力されるのも無理はないですよ。

せつかく仕掛けた盗聴器に延々と、

そんなどうでもいいアニメ談義が入っているんですからね。

・・・お気持ち、お察しいたしますよ。」

実は刑事の間で、今、密やかに
アルプスの少女ハイジDVDと、
ド根性カエルのVHSビデオが、流行していることは
笹垣には秘密にしておいたほうがいいだろうと神崎は判断した。

この老いぼれた刑事に、これ以上の心労を
何も負わせることはない。

「そうか・・神崎よ。ありがとさん。
ワシの気持ちがおまえに分かるとは思えんが、
言葉はありがたくもろうとくで・・。」

「分かつてるつもりですよ、笹垣さん。
これでも刑事の端くれです。
有益な情報に辿り着けないばかりか、そんなろくでもない
馬鹿馬鹿しい情報しか手に入れられなかったなんて・・
俺だったら、寝込みますよ、ほんとに・・。」

神崎は、昨夜の
フランクフルトから戻ったハイジとおんじの
感動的な再会シーンを思い出して、胸が熱くなるのを
必死で堪え、神妙な顔つきで、笹垣にそう言った。

そういえば、ハイジの寝室の干草のベッドを作るシーンでも、
シーツをかける際、ハイジが風圧によりふわりと宙に浮く場面が、
使いまわされていたことを、神崎は青山と佐和子の会話により
思い出し、感銘を受けたのだが、
それもやはり笹垣には黙っておいたほうがいいであろうと

賢明な彼は即座に判断していた。

そんな神崎の気持ちを知ってか知らずか、
笹垣は思いつめた表情で、神崎の顔をじっと見つめている。

「ど・・・どうされたんですか？笹垣さん・・・。
まさか、盗聴器に有益な情報が残されていたとか・・・？」

「ワシはな・・・神崎。」

「・・・はい。」

「話せば長くなるが、聴いてくれるか？」

「・・・はい。なんでしょうか？」

「ワシは、誰よりも野口さんが、

この世で一番、

セクシーキュートな女性や思ってるんや。

キュッキュッキュッ。
」

その後、神埼が、

「ちびまる子」のまるちゃんのクラスメイト

“野口さん（本名野口笑子）” に関する微細な情報を、

およそ2時間半に渡り、笹垣から聴かされ続けている間、

俄かに慌しくなる捜査一課では、加納佐和子に関する有益な情報が、

ある匿名電話により、齎されていたのであった。

「佐和子ピアノ教室でピアノを習った男性は、

なにかしら心に深い傷を負い、

一部、激しい女性恐怖症に陥っている男性もいる。

尚、成人男性のほとんどは、

EDと呼ばれる症状により今も正常な性行為を行なえず、

幼児の場合は、立ちションができないという症例に悩まれている。」

この匿名電話の主が、メイドの麻由美であることを
笹垣が知るのは、バレンタイン前夜の屋台のおでん屋で、
蒟蒻に齧りつきながら、
見ず知らずの隣の客を、激しく威嚇している最中であつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8229a/>

ピアノ教師佐和子の日常

2010年11月10日18時12分発行